

思ひ出

抒情小曲集

北原白秋

青空文庫

この小さき抒情小曲集をそのかみのあえかなりしわが母上と、愛弟 Tinka John に贈る。

Tonka John.

OMMOIDÉ.



わが生ひたち

……時は逝く、何時しらず柔らかに影してぞゆく、
時は逝く、赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。

(過ぎし日第二十)

1

時は過ぎた。さうして温かい苳^{かりむぎ}麥のほめきに、赤い首^{くび}の蜚^ひに、或は青いとんぼの眼に、黒猫の美しい毛色に、謂れなき不可思議の愛着を寄せた私の幼年時代も何時の間にか慕

はしい「思ひ出」の哀歡となつてゆく。

捉へがたい感覺の記憶は今日もなほ私の心を苛^{いら}だたしめ、恐れしめ、歎かしめ、苦しませる。この小さな抒情小曲集に歌はれた私の十五歳以前の Life はいかにも幼稚な柔順^{おとな}しい、然し飾氣のない、時としては淫婦の手を恐るゝ赤い石竹の花のやうに無智であつた。さうして驚き易い私の皮膚と靈はつねに 螽^{きりぎりす}斯の薄い四肢のやうに新しい發見の前に喜び顫へた。兎に角私は感じた。さうして生れたまゝの水々しい五官の感觸が私にある「神秘」を傳へ、ある「懷疑」の萌芽を微かながらも泡立たせたことは事實である。さうしてまだ知らぬ人生の「秘密」を知らうとする幼年の本能は常に銀箔の光を放つ水面にかのついついと跳ねてゆく水すましの番ひにも震^{わな}いたのである。

尤も、私は過去追憶にのみ生^いきんとするものではない。私はまたこの現在の生活に不満足な爲めに美しい過ぎし日の世界に、懐かしい靈の避難所を見出さうとする弱い心からかういふ詩作にのみ耽つてゐるのでもない。「思ひ出」は私の藝術の半面である。私は同時に「邪宗門」の象徴詩を公にし、今はまた「東京景物詩」の製作にも従ふてゐる。從てその一面をのみ觀て、輕々にその傾向なり詩風なりを速斷せらるゝほど作者に取つて苦痛なことではない。如何なる人生の姿にも矛盾はある。影の形に添ふごとく、開き盡した牡丹

花のかげに昨日の薄あかりのなほ顫へてやまぬやうに、現實に執する私の心は時として一碗の查ちよこれーと古律に蒸し熱い郷土のにほひを嗅ぎ、幽かな泊芙藍さふらんの凋れにある日の未練を残す。見果てぬ夢の歎きは目に見えぬ銀の鎖の微かに過去と現在とを繼いで慄くやうに、つねに忙たゞしい生活の耳元に噉り泣く。さはいへ此集の第三章に収めた「おもひで」二十篇の追憶體は寧ろ「邪宗門」以前の詩風であつた。まだ現實の痛苦にも思ひ到らず、ただ羅漫的な氣分の、何となき追憶に耽つたひとしきりの夢に過ぎなかつた。さりながら「生の芽生」及「Tonka John の悲哀」に輯めた新作の幾十篇には幼年を幼年として、自分の感覺に抵觸し得た現實の生そのものを拙ないながらも官能的に描き出さうと欲した。従つて用ゐた語彙なり手法なりもやはり現在風にして試みたのである。畢竟自叙傳として見て欲しい一種の感覺史なり性慾史なりに外ならぬ。實際私は過去を全く今の自分から遊離したものととして追慕するよりも、充實した現在生活の根底を更に力強く印象せしめんが爲に、兎に角過去といふわが第一の烙印を自分で力ある額の上に烙きつけようと欲したのである。とはいふものゝ、私はなほこの小さな詩集の限りある紙面に於て企畫した事の十分の一も描寫し得なかつたのを悲しむ。幼ない昔は兎に角秘密多き少年時代の感情生活はまだ／＼複雑であり神經的である。私はなほ何らかの新らしい形式の上にその切ないほど怪しかつ

た感覺の負債が充分に償ひ得べき何らかの新らしい機會の來らんことを待つ。

「斷章」の六十一篇は「邪宗門」と同時代の小曲であつてその以後の新風ではない。それは恰度強い印象派の色彩のかげに微かなテレピン油の潤りのさまよふてゐるやうに彼の集のかげに今なほ見出されずして顫へてゐたものである。私はかの私の抒情の「歌」ともにこの「斷章」のやうな仄かな藝術品が「邪宗門」や「東京景物詩」やその他の異なつた象徴詩の間にも、なほ純なるわかき日の悲しみを頼りなく伴奏しつゝあつた事をせめて首肯して欲しいのである。

私は兎に角、可憐なさうして手ごろの小さい抒情小曲集を、私のなつかしい人々の手に獻げたいと思つて、なるべく自分に親しみの深い、穉い時代の「思ひ出」を茲に集めた。従て私の生ひたちなり、生れた郷土の特色なり、豫め多少は知つて戴く必要がある。

2

私の郷里柳河は水郷である。さうして靜かな廢市の一つである。自然の風物は如何にも南國的であるが、既に柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠ほりわりのほひには日に日に廢れゆく

舊い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を超えて、わが街に入り来る旅びとはその周囲の太平野に分岐して、遠く近く瓏銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらう。さうして歩むにつれて、その水面の隨所に、菱の葉、蓮、眞菰、河骨、或は赤褐黄緑その他様々の浮藻の強烈な更紗模様のなかに微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう。水は清らかに流れて廢市に入り、廢れはてた *Noskai* 屋（遊女屋）の人もなき厨の下を流れ、洗濯女の白い洒布に注ぎ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む晝すぎを小料理屋の黒いダアリの花に歎き、酒造る水となり、汲水場くみづに立つ湯上りの素肌しなやかな肺病娘の唇を嗽ぎ、氣の弱い鷺の毛に擾るぶされ、さうして夜は觀音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら、樋を隔て、海近き沖ノ端おきの鹹川しほかわに落ちてゆく、靜かな幾多の溝渠はかうして昔のまゝの白壁に寂しく光り、たまたま芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、變化多き少年の秘密を育む。水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

*

折々の季節につれて四邊の風物も改まる。短い冬の間にも見る影もなく汚れ果てた田や畑に、刈株のみが鋤きかへされたまゝ色もなく乾き盡くし、羽に白い斑紋を持った怪しげ

な高麗鳥かうげがらす（この地方特殊の鳥）のみが廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ、さうして青い股引をつけた櫛はじの實採りの男が靜かに暮れゆく卵いろの梢を眺めては無言に手を動かしてゐる外には、展望の曠い平野丈に何らの見るべき變化もなく、凡てが陰鬱な光に被はれる。柳河の街の子供はかういふ時幽かなシユブタ（方言、鰐はえの一種）の腹の閃めきにも話にきく生膽取いきどもとの青い眼つきを思ひ出し、海邊の黒猫はほゞけ果てた白い穂の限りもなく戦いでいる枯葦原の中に、ぢつと蹲つたまゝ、過ぎゆく冬の囁きに晝もなほ耳かたむけて死ぬるであらう。

*

いづれにもまして春の季節の長いといふ事はまた此地方を限りなく悲しいものに思はせる、麥がのび、見わたす限りの平野に黄ろい菜の花の毛氈が柔かな軟風に薫り初めるころ、まだ見ぬ幸を求むるためにうらわかい町の娘の一群は笈に身を褰し、哀れな巡禮の姿となつて、初めて西國三十三番の札所を旅して歩く。（巡禮に出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、單にお嫁め入りの資格としてどんな良家の娘にも必要であつた。）その留守の間にも水車は長閑かに　　り、町端れの飾屋の爺は大きな鼈甲縁の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の愁にチンカチと鎚を鳴らし、片思の薄葉鐵職人ぶりきはぢり／＼と赤い封蝋を溶

かし、黄色い支那服の商人は生温い挨拶の言葉をかけて戸毎を覗き初める。春も半ばとなつて菜の花もちりかゝるころには街道のところどころに木蠟を平準して干す畑が蒼白く光り、さうして狐憑の女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井が造られる。その芝居小屋のかけをゆく馬車の喇叭のなつかしさよ。

さはいへ大麥の花が咲き、からしの花も實となる晩春の名残惜しさは青くさい芥子の萼や新らしい蠶豆の香ひにいつしかとまたまぎれてゆく。

まだ夏には早い五月の水路に杉の葉の飾りを取りつけ初めた大きな三神丸の一部をふと學校がへりに發見した沖ノ端の子供の喜びは何に譬へよう。艦の方の化粧部屋は蓆で張られ、昔ながらの廢れかけた舟舞臺には櫻の造花を隈なくかざし、欄干の三方に垂らした御簾は彩色も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭日となれば粹な町内の若い衆が紺の半被に棹さゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替ゆるたびに幕を替え、日を替ゆるたびに歌舞伎の藝題もと替えて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集まり、華やかに水郷の歡を盡くして別れるものゝ、何處かに頽廢の趣が見えて祭の濟んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。この騒ぎが靜まれば柳河にはまたゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは

星か、螢か、鶉の鳥か、

螢ならばお手にとろ、

お星様なら拜みませう……………

おさな

穉い時私はよくかういふ子守唄をきかされた、さうして恐ろしい夜の闇にをびえながら、

乳母の背せなか中から手を出して例の首の赤い螢を握りしめた時私はどんなに好奇の心に顫へた

であらう。實際螢は地方の名物である。馬鈴薯の花さくころ、街の小舟はまた幾つとなく

矢部川の流れを溯り初める。さうして甘酸ゆい燐光の息するたびに、あをあをと眼めに沁しみ

る螢籠に美しい假寝かりねの夢を時たまに閃めかしながら水のまにまに夜をこめて流れ下るの

を習慣とするのである。

*

長い霖雨の間に果實くだものの樹は孕み女のやうに重くしなだれ、ものゝ卵はねば／＼と瀦た

水まりみづのむじな藻もにからみつき、蛇は木にのぼり、眞菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうし

て凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊に鬼百合の赤い閃めきを先だて、^{ほとり}、烘くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水涵れて惡臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りつゝ咆えり、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮒のあたまは苦しさに泡を立てはじめ。七八月の炎暑はかうして平原の到るところの街々に激しい流^{はやり}行病^{やまひ}を仲介し、日ごと夕焼の赤い反照を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖ノ端の漁師原には男も女も半裸體のまゝ紅い西瓜をむさぼり、石炭酸の強い異臭の中に晝は寢ね、夜は病魔退散のまじなひととして廢れた街の中、或は堀の柳のかげにBANKO（椽臺）を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかゝつた家々のランプのかげから、死に瀕した虎列拉患者は恐ろしさうに蒲團を匍ひだし、ただちと薄あかりの中に色變えてゆく五色花火のしたゝりに疲れた瞳を集める。

燒酎の不攝生に人々の胃を犯すのもこの時である。犬殺しが歩き、巫女が酒倉に見えるのもこの時である。さうして雨乞の思ひ思ひに白粉をつけ、紅い隈どりを凝らした假裝行列の日に日に幾隊となく續いてゆくのもこの時である。さはいへまた久留米緋をつけ新らしい手籠を擁えた菱の實賣りの娘の、なつかしい「菱シヤンヨウ」の呼聲をきくのもこ

の時である。

*

九月に入つて登記所の庭に黄色い鶏頭の花が咲くやうになつてもまだ虎列拉^{コレラ}は止む氣色もない。若い町の辯護士が忙^{いそ}しうに粗末な硝子戸^{ではい}を出入りし、蒼白い藥種屋の娘の亂行の漸く人の噂に上るやうになれば秋はもう青い蒔柿を搗く酒屋の杵の音にも新らしい匂の爽かさを忍ばせる。

祇園會が了り秋もふけて線香を乾^{かわ}かす家、からし油を搾^{しぼ}る店、パラピン蠟燭を造る娘、提燈の繪を描く義太夫の師匠、ひとり飴形屋（飴^{あめ}形^{がた}は飴の一種である、柳河特殊のもの）の二階に取り殘された旅役者の女房、すべてがしんみりとした氣分に物の哀れを思ひ知る十月の末には、先づ秋祭の準備として柳河のあらゆる溝渠はあらゆる市民の手に依て、一旦水門の扉を閉され、水は干^ほされ、魚は掬^{すく}はれ、腥くさい水草は取り除かれ、溝^{どぶ}どろは奇麗に浚ひ盡くされる。この「水落ち」の樂しさは町の子供の何にも代へ難い季節の華である。さうしてこの一騒^{さわ}ぎのあとから、また久闊^{ひさし}ぶりに清らかな水は廢市に注ぎ入り、樂しい祭の前^{まへ}觸^ふれが、異様な道化^{どうげ}の服裝をして、喇叭を鳴らし拍子木を打ちつゝ、明日^{あす}の芝居^{げだい}の藝題を面白ろをかしく披露しながら町から町へと巡り歩く。

祭は町から町へ日を異にして準備される、さうして彼我の家庭を擧げて往來しては一夕の愉快なる團欒に美くしい懇親の情を交すのである。加之、識る人も識らぬ人も酔うては無禮講の風俗をかしく、朱欒さぼんの實のかけに幼兒と獨樂こまを回まはし、戸ごとに酒をたづねては浮かれ歩く。祭のあとの寂しさはまた格別である。野は火のやうな櫨紅葉に百舌がただ啼きしきるばかり、何處からともなく漂浪さすらふて來た傀儡師くぐつまはしの肩の上に、生白おいらんい華魁の首が、カツクカツと眉を振る物凄さも、何時の間にか人々の記憶から掻き消されるやうに消え失せて、寂しい寂しい冬が来る。

*

要するに柳河は廢市である。とある街の辻に古くから立つてゐる圓筒状の黒い廣告塔に、折々おりく、西洋奇術の貼札はりふだが紅いへらへら踊の怪しい景氣をつけるほかには、よし今のやうに、アセチリン瓦斯を點つけ、新たに電氣燈でんきをひいて見たところで、格別、これはといふ變化も凡ての沈滞から美くしい手品てしなを見せるやうに容易く蘇よみがへらせる事は不可能であらう。ただ偶々たまに東京がへりの若い齒科醫がその窓の障子に氣まぐれな紅い硝子を入れただけのこと、何時しか屋根に薊の咲いた古い旅籠屋にほんの商用向の旅人が殆ど泊つたけはひも見せないで立つて了ふ。ただ何時通つても白痴の久たんは青い手拭を被つたまゝ同じ

風に同じ電信柱をかき抱き、ボンボン時計を修繕す禿頭は硝子戸の中に俯向いたぎりチツクタツクと音をつまみ、本屋の主人は蒼白い顔をして空をたゞ凝視めてゐる。かういふ何の物音もなく眠つた街に、住む人は因循で、ただ柔順しく、僅かに Constan (良家の娘、方言) のあの情の深さうな、そして流暢な、軟かみのある語韻の九州には珍らしいほど京都風なのに阿蘭陀訛の溶け込んだ夕暮のささやきばかりがなつかしい。風俗の淫らかなのにひきかへて遊女屋のひとつも残らず廢れたのは哀れぶかい趣のひとつであるが、それも小さな平和な街の小さな世間體を恐るゝ——利發な心が卑怯にも人の目につき易い遊びから自然と身を退くに至つたのであらう。いまでもなほ黒いダアリヤのかげから、かくれ遊びの三味線は晝もきこえて水はむかしのやうに流れてゆく。

3

柳河を南に約半里ほど隔てて六騎ロツキユの街沖ノ端まわきがある。はた（六騎ロツキユとはこの街に住む漁夫の譚名であつて、昔平家没落の砌に打ち洩らされの六騎がここへ落ちて來て初めて漁りに従事したといふ、而してその子孫が世々その業を繼襲し、繁殖して今日の部落を爲すに至

つたのである。―畢竟は柳河の一部と見做すべきも、海に近いただけ凡ての習俗もより多く南國的な、怠惰けた規律しまりのない何となく投げやりなところがある。さうしてかの柳河のただ外面うはべに取すまして廢れた面紗おもぎぬのかげに淫みだらな秘密を匿かくしてゐるのに比ぶれば、凡てが露あらはで、元氣で、また華やかである。かの巡禮の行樂、虎列拉コレラ避けの花火、さては古めかしい水祭の行事などおほかたこの街特殊のものであつて、張のつよい言葉つきも淫ひもじらに、ことにこの街のわかい六騎ロッキュは温すなければ漁り、風の吹く日は遊び、雨には寢いね、空腹ひもじくなれば食くらひ、酒をのみては月琴を弾き、夜はただ女を抱くといふ風である。かうして宗教を遊樂に結びつけ、遊樂の中に微かに一味の哀感を繼いでゐる。觀世音は永久とこしへにうらわかい街の處女に依いつて齋いっがれ（各の町に一體づつの觀世音を祭る、物日にはそれぞれある店の一部を借りて開帳し、これに待つくわかい娘たちは參詣の人にくろ豆を配くばり、或は小屋をかけていろいろの催もよふしをする。さうしてこの中の資格は處女に限られ、縁づいたものは籍を除かれ、新らしい妙齡としごろのものが代つて入る。）天火てんびのふる祭の晩の神前に幾つとなくかかぐる牡丹からしの唐獅子の大提燈は、またわかい六騎ロッキュの逞ましい日に焼けた腕かひなに献まげられ、霜月親鸞上人の御正忌となれば七日七夜の法要は寺々の鐘鳴りわたり、朝の御講まうに詣まづるとては、わかい男をとこ女をんな夜明まへの街の溝石をからころと踏み鳴らしながら御正忌めえ參らんか

ん……………の淫らな小歌に浮かれて嬉^{あひぎ}曳^ぎの楽しさを佛のまへに祈るのである。

沖^{おき}ノ端^{はた}の寫眞を見る人は柳、梅檀、櫨などのかげに、而も街の眞^ま中^{んなか}を人工的水路の、水もひたひたと白く光つては芍薬の根を洗ひ洗濯女の手に波紋を畫く夏の眞畫の光景に一種のある異國的情緒の微漾を感じるであらう。あの水祭はここで催され藍^{あいだま}玉の俵を載せ、或は葡萄酒の酒袋^{にほひ}を香の滴るばかり積みかさねた小舟は毎日ここを上下する。正面の白壁はわが叔父の新宅であつて、高い酒倉は藁の上部を現はすのみ。かうして、私の母家はこの水の右折して、終に二條の大きな樋に極まり、渦を卷いて鹹川に落ちてゆくその袂から、是に左したるところにある。

今は銀行となつたが、もとはやはり姻戚の阿波の藍^{あいだま}玉屋^やの生鼠^{なまこ}壁^{かべ}の隣に越太夫という義太夫の師匠が何時も氣輕な肩肌ぬぎの婆さんと差向ひで、大きな大きな提燈を張り代へながら、極彩色で牡丹に唐獅子や、櫻のちらしなどをよく描いてゐた藁葺きの小店と、それと相對して同じ様な生鼠壁の舊家が二つ並んでゐる。何れも魚問屋で右が醤油を造り、左が酒を造つた。その酒屋の、私は Tonka John（大きい坊ちゃん、弟と比較していふ、阿蘭陀訛か。）である。して、隣は矢張り祖父時代に岐れた北原の分家で、後には醤油釀造を止した。

南町の私の家を差覗く人は、薊や蒲公英たんぽぽの生えた舊い土藏づくりの朽ちかゝつた屋根の下に、濫い店格子を透いて、銘酒を満たした五つの朱塗の樽と、同じ色の桧のいくつかに目を留めるであらう。さうしてその上の梁はりの一つに、紺色の可憐な燕の雛が懷かしさうに、牡丹いろの頬をちらりと巢の外に見せて、ついついと鳴いてゐる日もあつた。土間は廣く、みせいっぱい店全幅の藥種屋やくしゅやしき式の硝子戸棚には曇つた山葵色わさびいろの紙が張つて、その中なかほどの柱に阿蘭陀渡の古い掛時計が、まだ正確に、その扉の繪の、眼の青い、そして胸の白い女の横顔のうへに、チクタクと秒刻の優しい歩みを續けてゐた。その戸棚を開けると緑簪、硝石、甘草、肉桂、薄荷、どくだめの葉、中には賣藥の版木等がしんみりと交錯こんがらがつた一種異様の臭を放つ。それはある漂浪者がこゝに來て食客をしてゐた時分密かに町の人に藥を賣つてゐたのが、逝なくなつたので、そのまゝにしてあるといふ、舊い話であらう。

庭には無論朱欒の老木が十月となれば何時も黄色い大きな實をつけた。その後の高い穀倉に秋は日ごとに赤い夕陽を照りつけ、小流を隔てゝ十戸ばかりの並倉に夏の酒は濕つて悲しみ、温かい春の日のペンペン草の上に桶匠おけなわは長閑に槌を鳴らし、赤裸々あかはだかの酒屋さかや男とこは雪のふる臘月にも酒の仕込みしこみに走り回り、さうして街の水路から樋をくぐつて來るかちひの小さい流ながれは隱居屋の涼み臺の下を流れ、泉水に分れ注ぎ、酒桶を洗ひ眞白な米を流す

水となり、同じ屋敷内の瀦水に落ち、ガメノシユブタケ（藻の一種）の毛根を幽かに顫はせ、然るのち、ちゆうまえんだの菜園を一周回して貧しい六騎の厨裏に濁つた澱みをつくるのであつた。そのちゆうまえんだはもと古い僧院の跡だといふ深い竹藪であつたのを、私の七八歳のころ、父が他から買ひ求めて、竹藪を拓き野菜をつくり、柑子を植ゑ、西洋草花を培養した。それでもなほ晝は赤い鬼百合の咲く畑に夜は幽霊の生じろい火が燃えた。

世間ではこの舊家を屋號通りに「油屋」と呼び、或は「古問屋」と稱へた。實際私の生家は此六騎街中の一二の家柄であるばかりでなく、酒造家としても最も石數高く、魚類の問屋としては九州地方の老舗として夙に知られてゐたのである。従て濱に出ると平戸、五島、薩摩、天草、長崎等の船が無鹽、鹽魚、鯨、南瓜、西瓜、たまには鷺鳥、七面鳥の類まで積んで來て、絶えず取引してゐたものだつた。さうして魚市場の閑な折々は、血のついた腥くさい鰓石の上で、旅興行の手品師が雛子おもしろく、咽喉を眞赤に開けては、激しい夕焼の中で、よく大きな雁首の煙管を管いっぱいに呑んで見せたものである。私はかういふ雰圍氣の中で何時も可なり贅澤な氣分のもとに所謂油屋の Tonka John として安らかに生ひ立つたのである。

4

私の第二の故郷は肥後の南關であつた。南關は柳河より東五里、筑後境の物靜かな山中の小市街である。その街の近郊外目ほかめの山あひに恰も小さな城のやうに何時も夕日の反照をうけて、たまたま舊道をゆく人の瞻仰の的となつた天守造りの眞白な三層樓があつた。それが母の生れた家であつて、數代この近郷の尊敬と素朴な農人の信望とをあつめた石井家の邸宅であつた。

私もまたこの小さな國の老侯のやうに敬はれ、侍かれかしづ、慕はれて、餘生を讀書三昧に耽つた外祖業隆なりたか翁の眞白な長髯のなつかしさを忘るる事が出來ぬ。私は土地の習慣上實はこの家で生れて——明治十八年二月二十五日——然る後古めかしい黒塗の駕籠に乗つて、まだ若い母上と柳河に歸つた。

私は生れて極めて虚弱な兒であつた。さうして癩癩の強い、ほんの僅かな外氣に當るか、冷たい指さきにさは觸られても、直ぐ四十度近くの高熱を喚び起した程、危険極まる兒であつた。石井家では私を柳河の「びいどろ饅」と綽名した位、殆ど壞れ物に觸るやうな心持ち

で恐れて誰もえう抱けなかつたさうである。それで彼此往來するにしても俾からでなしに、わざわざ古めかしい女をんなのりもの駕籠を仕立てたほど和蘭の舶來品扱ひにされた。それでもある時などは着いてすぐ玄關に昇ぎ据えた駕籠の、扉をあけて手から手へ渡されたばかりをもう蒼くなつて瘡癩けて了つたさうである。

三歳の時、私は劇しい窒チブス扶斯に罹つた。さうして朱ザボン欒の花の白くちるかげから通つてゆく葬列を見て初めて私は乳母の死を知つた。彼女は私の身熱のあまり高かつたため何時しか病を傳染うつされて、私の身代りに死んだのである。私の彼女に於ける記憶は別にこれといふものもない。ただ母上のふところから伸びあがつて白い柩を眺めた時、その時が初めてのまた終りであつた。

家に來た乳母はおいそと云つた。私はよく彼女かれと外目ほかめの母の家に行つては何時いつも長長と滞留した。さうして迎ひの人力車がその銀の輪をキラキラさして遙かの山すその岡の赤い曼珠沙華のかげから寝ころんで見た小さな視界のひとすじ道を懷かしさうに音をたてて軋つて來るまで、私たちは山にゆき谷にゆき、さうしてただ夢の様に何ものかを探し回つてもう馴なれつこになつて珍らしくもない自分たちの瀉くさい海の方へ歸らうとも思はなんだ。

かういふ次第で私は小さい時から山のにほひに親しむことが出來た。私はその山の中で

初めて松脂のにほひを嗅ぎ、ゐもりの赤い腹を知つた。さうして玉蟲と斑猫はんめうと毒茸と、………いろいろの草木、昆蟲、禽獸から放散する特殊のかをりを凡て驚異の觸感を以て嗅いで回つた。かかる場合に私の五官はいかに新しい喜びに顫へたであらう。それは恰度薄い紗きれに冷たいアルコールを浸して身體の一部を拭いたあとのやうに山の空氣は常に爽やかな幼年時代の官感を刺戟せずには措かなかつた。

南關の春祭りはまた六騎ロッキュの街に育つた羅漫ロマンチック的な幼兒をして山に對する好奇心を煽てるに充分であつた。私は祭物見の前後に顫へながらどんぐりの實のお池の水に落つる音をきき、それからわかい叔母の乳くびを何となく手で觸つた。

5

さて、柳河の虚弱なびいどろ饅いつは何時のまにか内氣な柔順おとなしいさうして癩の蟲のひりひりした兒になつた。私はよく近所の兒どもを集めて、あかい夕日のさし込んだ穀倉のなかで、温かな苧麥やほぐれた空あきだはら俵のかげを二十日鼠のやうに騒さわぎ回つた。さうしてかくれんぼの息をひそめて、仲のいい女の兒と、とある隅の壁の方に肩を小さくして探さがし手を

待つてゐる間に、しばしば埋もれた驚の卵を見つけ出し、さうして棟木のかげからぬると匍ひ下る青大將のあの凄^{ひにく}い皮肉な晝の眠つきを恐れた。

日の中はかうしてうやむやに過ぎてゆくが、夜が來て酒倉の暗い中から酹^{もと}すり歌の櫓^{かい}の音がしんみりと調子^{てうし}をそろへて靜かな空の闇に消えてゆく時分^{じぶん}になれば赤い三日月の差し入る幼兒^{をさなご}の寢部屋^{ねぐら}の窓に青い眼をした生膽取^{いきぎもとり}の「時」がくる。

私は「夜」というものが怖^{こは}かつた。何故にこんな明るい晝のあとから「夜」といふ厭な恐ろしいものが見えるのか、私は疑つた、さうして乳母の胸に犇^{ひし}と抱きついては眼の色も變るまで慄^{わなな}いたものだ。眞夜中の時計の音もまた妄想に痺れた Tonka John の小さな頭腦に生膽取の血のついた足音を忍びやかに刻みつけながら、時々深い奈落にでも引つ込むやうに、ボーンと時を點^うつ。

後^{のち}には晝の日なかにも蒼白い幽靈を見るやうになつた。黒猫の背なかから臭^{におひ}の強い大麥の穂を眺めながら、前^{さき}の世の母を思ひ、まだ見ぬなつかしい何^{なに}人^{ひと}かを探すやうなあどけない眼つきをした。ある時はまた、現在のわが父母は果してわが眞實の親かといふ恐ろしい疑^{うたがひ}に罹^かつて酒桶のかげの蒼じろい黴^{かび}のうへに素足をつけて、明るい晝の日を寂しい倉のすみに坐つた。その恐ろしい謎^{なぞ}を投げたのは氣^き狂^{きちがひ}のおみかの婆である。温かい五月の苺

の花が咲くころ、楽しげに青い硝子を碎いて、風の絲の鋭い上にも鋭いやうに瀝青チヤンの製造に餘念もなかつた時、彼女かれは恐ろしさうに入つて來た、さうして顫へてる私に、Tonka Jo おまへ つか ほんとお母さんは眞實のお母さんかろ、返事をなさろ、證據があるなら出して見んの――私は青くなつた、さうして駈けて母のふところに抱きついたものの、また恐ろしくなつて逃げるやうに父のところに行つた。丁度何かで不機嫌だつた父は金庫の把手とりてをひねりながら鍵かぎの穴に鍵をキリリと入れて、チロツトとその兒を振りかへつた、私はわつと泣いた。それからといふものは小鳥の歌でさへ私には恐ろしいある囁ささやきにきこえたのである。

そりばつてん、Tonka John はまだ氣まぐれな兒であつた。七月が來て觀音様の晩になれば、町のわかい娘たちはいつも奇麗な踊り小屋を作へて、華やかな引幕をひきその中で投げやりな風俗の浮々うきと囀さへづりかはしながら踊つた。それにあの情じやうの薄く我儘な私と三つ違いの異母姉ねえさんも可哀かはい姿で踊つた。五歳六歳の私もまた引き入れられて、眞白に白粉を塗り、派出はでなきものをつけて、何がなしに小さい手をひらいて踊つた。

静かな晝のお葬式に、あの取澄ました納所坊主の折々ぐわらんと鳴らす鐃鉞の音を聞いたばかりでも笑ひ轉げ、單に佛手柑の實が酸ゆかつたといつては世の中をつくづく果敢なむだ頃の Tonka John の心は今思ふても罪のない鷹揚なものであつた。さうしてその恐ろしく我儘な氣分のなかにも既にしをらしい初戀の芽は萌えてゐた。

美しい小さな Gonshan. 忘れもせぬ七歳の日の水祭に初めてその兒を見てからといふものは私の羞耻に満ちた幼い心臓は紅玉入の小さな時計でも懷中に匿してゐるやうに何時となく幽かに顫へ初めた。

私はある夕かた、六騎の貧しい子供らの群に交つて喇叭を鳴らし、腐れた野菜と胡蘿蔔の汚れた溝どろのそばに、粗末な蓆の小屋をかけて、柔かな羽蟲の繾綣を哀しみながら、ただひとり金紙に緋緘の鎧をつけ、鍬形のついた甲を戴き、木太刀を佩いて生眞面目に芝居の身振をしてゐたことがあつた。さうして魚くさい見物のなかに蠶豆の青い液に小さな指さきを染めて、罪もなくその葉を鳴らしながら、ぱつちりと黒い眸を見ひらいて立つてゐたその兒をちらと私の見出した時に、ただくわつと逆上て云ふべき臺辭も忘れ、極り惡るさに俯向いて了つた——その前を六騎の汚ない子供らが鼻汁を垂らし、黒坊のやうな赭つちやけた裸で、不審さうに彼らが小さな主人公の顔を見かへりながら、張合もなく何

時までも翻筋斗とんぼがへりをしてゐた事を思ひ出す。

あの日はまた穀倉の暗い二階の隅に幕を張り薄青い幻燈の雪を映うつしては、長持のなかに藏しまつてある祭の山車だしの、金の薄い垂尾たりををいくつとなく下げた、鳳凰の羽はねの、あるかなき幽かな囁きにも耳かたむけた。

かうした間にも夏の休暇やすみには必ず山をたづねた。さうして柳河の Tonka John はまたその一郷の罪もない小君主であつた。路に逢ふほどの農人はみな丁寧ていねいにその青い頬かむりを解といて會釋かいせきした、私はまた何事もわが意の儘に左右し得るものと信じた。而して自分ひとりが特別に天の恩寵に預つてゐるような勝ち誇つた心になつてたゞ我儘に跳ね回つた。

黒馬あをにもよく乗つた、玉蟲もよく捕へては針で殺した、蟻の穴を獨樂の心棒でほちくり回し、石油をかけ、時には憎いもののやうに毛蟲を踏みにじつた。女の子の唇にも毒々しい蝶の粉をなすりつけた。然しながら私は矢張りひとりぼっちだつた。ひとりぼっちで、靜かに蠶室の桑の葉のあひだに坐つて、幽かな音をたてては食み盡くす蠶の眼のふちの無智な薄褐かばいろ色わななの慄おそきを凝と眺めながら子供ごころにも寂しい人生の何ものかに觸れえたやうな氣がした。

夜になれば一番年のわかい熊本英語學校出の叔父がゆめのやうなその天守の欄干てすりに出て

よく笛を吹いた。さうして彼方あちら此方こちらの秣まぐさや凋しれた南瓜の花のかげから山の兒どもが栗毛の汗のついた指で、しんみりと手づくりの笛を吹きはじめる。さうして何時も谷を隔てた圓い丘の上に、また圓まんまるな明るい月が夕照ゆふやけの赤く残つた空を恰てうど度花札の二十坊主のやうにのぼつたものである。

かういふ時、私は晝の「催眠術」の代償として——この快活な叔父が曾て催眠術の新書を手に入れた事があつた。それからといふものは無理に私を蠶室の暗い一室に連れ込んで怪しい眼付やをかしな手眞似を爲はじめた、私は決して眠らなかつた。始めはよく轉げて笑つたものの、後にはあまりに叔父の生眞面目きまじめなのに恐ろしくなつて幾度か逃げようとした。顫ふるへてゐる私の眼の前には白い蛾の粉こなのついた大きな掌てのひらと十本の指の間から凝ぢつと睨にらんでゐる黒い眼、……蠶の卵はちまの弾はく音、繭を食ひ切る音、はづんだ生殖せいじくの顫ふるへ、凡てが恐怖それに蒼くなつた私の耳に小さな剃刀をいれるやうに絶間なく沁み込んで来る。私は何時も最後しまひには泣き出したのである。——そのパノラマのやうな夜景のなかで、亞拉比亞アラビヤ夜話の曾邊伊傳ソベイデの譚はなしや、西洋奇談の魔法使ひや、驢馬なに化された西藏王子の話ふしぎを聞かして貰つて、さうして縁ふちの赤い黒表紙の讚美歌集をまさぐりながらそのまま奇異な眠ふしぎに落ちるのが常であつた。

7

私はこの當時まだあの蒼い海といふもの曾て見たことがなかつた。海といふものに就て私の第一の印象は私を抱いて船から上陸した人の眞白な蝙蝠傘の輝きであつた。それは夏の眞晝だつたかも知れぬ、痛いほど眼に沁んだ白色はその後未だに忘れることが出来なかつた。それが何時だつたか、それからどうしたか、さつぱり私には記憶がない。それが不圖したことからある近親の人の眼を患つて肥前小濱の湯治場に滞留してゐた頃、母と乳母とあかんぼと遙る船から海を渡つて見舞に行つた當時の出来事だということがわかつた。その話から、不思議に Tonka John の記憶にもまだ残つてゐたことを聞いた時のその人の驚きはをかしいほどであつた。何故ならばその當時私はまだほんの乳のみ兒で當歳か、やつと二歳かであつたのである。次で乳母の背なかから見た海は濁つた黄いろい象の皮膚のやうなものだつた。さうして潮の引いたあとの瀉の色の恐ろしいまで滑らかな傾斜はかの大空の反射をうけた群青の光澤とともに、如何に私の神経を脅かしたか、瀉といふものを見たことのない人には到底不可解のものであらう。この詩集には載せなかつたが、

矢張り「思ひ出」の中に私はその時の恐怖を歌つたものがある。

海を見てはじめおそれぬ。

そは何時か、乳母の背に寝て、

色青き鯨の髻を賣るといふ老舗見しごと。

それから年を経て、私はその瀉がたのなかに「ムツゴロ」といふ奇異な魚の棲息してゐることを知つた。そうしてその山椒魚さんしょうをに似た怪しい皮膚の、小さなぬもり状の一群を恐ろしいもののやうに、覗きに行つた。後には吹矢ふきやのさきを二つに割さいて、その眼や頭あたまを狙ねらつて殺して歩あるいたこともある。瀉にはまた「ワラスボ」といふ鰻に似て肌の生赤い斑點ふちのあゝ、ぬるぬるとした靜脈色の魚もゐた。魚といふよりも寧ろ蛇類の癩病にかかつた姿である。「メクワジヤ」と稱する貝は青くて病的な香を發する下等動物である。それを多食する吝嗇けちんぼの女房はよく眼を病んで堀端ほりばたで鍋を洗つてゐた。「アゲマキ」といふ貝は瀟洒な薄黄色の殻からのなかに、やはり薄黄色の帽子をつけた片跛かたちんばの人間そのままの姿をして滑稽にもセピア色の禪をしめた小さな而して美味な生物である。その貝を捕る女は半切はんぎりを片手に引き寄せながら板子を滑らしては面白ろさうに走つてゆく。恰度、夏の入日があかかと反射する時、私達の手から殘酷に投げ棄てられた黒猫が、黒猫の眼が、ぬるぬる

と滑り込みながら、もがけばもがくほど粘^{ねばねば}々しい瀉の吸盤に吸ひ込まれて、苦しまぎれに斷末魔、爪を搔きちらした一種異様の恐ろしい粘彩畫の上を、女はまた輕るく走りながらその板を滑らせては光澤^{つや}つやと平準^{なら}してゆく。さうして汐の靜かにさしてくる日没後の傾斜面は沈着^{おちつ}いた紫色の光を帶びて幽かに夕づつのかげを浮べる。かうして瀉の不可思議は私たちの幼年時代に取つては實に怪しくも美しい何かしら深い秘密を秘めた恐怖と光の魔宮であつた。

それは兎もあれ、十六の初旅に小蒸汽や赤い商船のかげに見た門司の海の凄いほど透きわたつた濃藍色はどんなに私をして新しい西洋の香に噎^{おどろ}ばしめたであらう。さうしてその翌年長崎旅行の途次汽車の窓から見た大村灣の風光は實にかの繪にのみ見た廣重の海の青さであつた。

8

蛇目傘^{じやのめ}を肩にしてキツとなつた定九郎の青い眼つきや、赤い毛布のかげを立つてゆく芝居の死人などに一種の奇妙な恐怖を懷いた三四歳の頃から私の異國趣味乃至異常な氣分に

憧がる心は蕨の花のやうに特殊な縮れ方をした。

かういふ最初の記憶はウオタアヒアシンスの花の灰かに咲いた瀧水の傍をぶらつきながら、従姉とその背に負はれてゐた私と、つい見惚れて一緒に陥つた——その生命の瀬戸際に飄然と現はれて救ひ上げて呉れた眞黒な坊さんが不思議にも幼児にある忘れがたい印象を残した。

日が蝕ひ、黄色い陰鬱の光のもとにまだ見も知らぬ寂しい鳥がほろほろと鳴き、曼珠沙華のかげを馳が急忙しく横ぎるあとから、あの恐ろしい生膽取は忍んで来る。薄あかりのなかに凝視むる小さな銀側時計の怪しい數字に苦蓬の香沁みわたり、右に持った薄手の和蘭皿にはまだ眞赤な幼児の生膽がヒクヒクと息をつく。水門の上を蒼白い月がのぼり、梅檀の葉につやつやと露がたまれば膽のわななきもはたと靜止して足もとにはちんちろりんが鳴きはじめる。日が暮れるとこの妄想の恐怖は何時も小さな幼児の胸に鋭利な鋏の尖端を突きつけた。

ある夜はわれとわが靈の姿にも驚かされたことがある。外には三味線の音はじめも投げやり、町の娘たちは観音さまの紅い提燈に結びたての髪を匂はしながら、華やかに肩肌脱ぎの一系列になつてあの淫らな活惚を踊つてゐた。取り亂した化粧部屋にはただひとり

三歳四歳みつよつの私が匍はひりながら何ものかを探すやうにいらいと氣を焦あせつてゐた。ある拍子に、ふと薄暗い鏡の中に私は私の思ひがけない姿に衝突ぶつかつたのである。鏡に映つた兒どもの、面つらには凄おそろいほど眞白まつしろに白粉おしろひを塗ぬつてあつた、睫まつげのみ黒くパツチリと開ひらいた兩の眼の底から恐怖おそれに竦すくんだ瞳が生眞面目きまじめに震わな慄ないてゐた。さうして見よ、背後うしろから尾をあけ背せを高めた黒猫がただちと金きんの眼を光らしてゐたではないか。私は悸然ぎよつとして泣いた。私の異國趣味は穉ちい時既にわが手の中に操あやつられた。菱形の西洋風を飛ばし、朱色しゆいろの面めん（朱色人面の風、Tonka John の持つてゐたのは直徑一間半ほどあつた。）を裸の酒屋男七八人に揚げさせ、瀝青チヤンを作り、幻燈を映し、さうして和蘭訛の小歌を歌つた。私はまたいろいろの小さなびいどろ罎しめに薄荷や肉桂水を入れて吸あるつて歩いた。また濃い液は白紙に垂らし、柔かに揉しめんで濕しめした上その端々はしばしを小さく引き裂いては唇にあてた。さうして私の行くところにはたよりない幼兒の涙をそそるやうに、強い肉桂の香が何時いつでも付き纏まとふて離れなかつた。

うつし繪おもてしめの面に濕しめつた仄かな油のひほひはまた新らしい七歳の夏を印象せしめる。私はよく汗のついた手首に、その繪の女王や昆虫の彩色を痒かゆいほど押しは貼り、剥はがしてはそつと貼りつけて、水路の小舟に伊蘇普物語いそつぷの奇あやしい頁を翻かへした。

無邪氣な惡戲^{いたづら}の末、片意地に芝居見を強請^{せが}んだ末、弟を泣かした末、私は終日土藏の中に押し込められて泣き叫んだ。その窓^{まど}の下には露草^{つゆぐさ}の仄かな花が咲いてゐた。哀れな小さい囚人はかうして泣き疲れたあと、何時もその潤^{うる}んだ眶^{まぶた}に幽かな燐のほひの沁み入る薄暗い空氣の氣はひを感じた。そこには舊い昔難破した商船から拾ひ上げた阿蘭陀^{おらんた}附木（マツチのこと、柳河語）の大きな函^{しめ}が濕^{しめ}りに濕つたまま投げ出されてあつた。私はそのひとつを涙に濡れた手で拾ひ取り、さうしてその黄色なエチケツトの帆船航海の圖に怪しい哀れさを感じながら、その一本を抜いては懷^{なつ}かしさうに擦^すつて見た。無論點火する氣づかひはない。氣づかひはないが、たゞ何時までも何時までも同じやうにたゞ擦^すつてゐたかつたのである。麴^{かうじむろ}室^{むろ}のなかによく弄^なんだ骨牌^{カルタ}の女王のなつかしさはいふまでもない。

Tonka John の部屋にはまた生れた以前から舊い油繪の大額が煤けきつたまま土藏づくりの鐵格子窓から薄い光線を受けて、柔かにものの吐息のなかに沈黙してゐた。その繪は白いホテルや、瀟洒な外輪船の駛^{はし}つてゐる異國の港の風景で、赤い斷層面のかげをゆく和蘭人の一人が新らしいキヤベツ畑の垣根に腰をかがめて放尿してゐる、おつとりとした懷かしい風俗を畫いたものであつた。私はそのかげで毎夜美しい姉上や肥滿^{ふと}つた氣の輕い乳母と一緒に眠るのが常であつた。

頑固で、何時もむつつりした、舊い家から滅多に外へも出た事はなく、流行唄のひとつすら唄へなかつた私の父にも矢張り氣まぐれな道樂はあつた。あの陰氣な稻荷の巫女や、天狗使ひや、 $(A+B)^2$ ……などの方程式で怪しい占ひをした漂浪者や、護摩を焚く琵琶法師やを滯留さしては、いろいろな不思議を信じた行爲の閑暇にはまた七面鳥を朱鸞のかげに放ち、二三百の白い鉢に牡丹を開かせ、鶏を飼ひ、薔薇を植ゑる事を忘れなかつた。さうして様々に飽きはてては年毎にその對手を替へた。鶏を鷺に替え、朝顔のために前の薔薇を根こそぎ棄てて了つた。さうして遂にはちゆうまえんだに豚小屋まで設けたほど、凡てが投げやりであつた。

私はまた五島平土の船頭衆から長崎や島原の歌も聞いた。年の師走には市が立つてそれらの珍客を載せた大船はいつも四十艘五十艘と港入りした。酒造のほかに何の物音もしなかつた沖ノ端の街は急に色めき渡つて再び戦のやうな「古問屋の師走業」がはじまる。さうしてこの家の舊い習慣として、その前後に催さるる入船出船の酒宴には長崎の紅い三尺手拭を鉢巻にして、琉球節を唄ふ放恣にして素朴な船頭衆のなかに、柳河のしをらしい藝妓や舞子が頑くななな主人の心まで浮々するやうに三味線を弾き、太鼓を敲いた。その小さい舞子のなかの美しい一人を Tonka John はまた何となく愛しいものに思つた。

9

舌出人形の赤い舌を引き抜き、黒い揚羽蝶あげはの翅はねをむしりちらした心はまたリイダアの版畫の新しい手觸てさはりを知るやうになつた。而してただ九歳以後のさだかならぬ性慾の對象として新奇な書籍——ことに西洋奇談——ほど Tonka John の幼い心を掻き亂したものは無かつた。「埋れ木」のゲザがボオドレエルの「惡の華」をまさぐりながら解わからぬながらもあの怪しい幻想の匂ひに憧れたといふ同じ幼年の思ひ出のなつかしさよ。

外目ほかめの祖父は雪の日の爐邊に可哀い沖ノ端の孫を引きよせながら懷かしさうに佛蘭西式調練の小太鼓の囃子を歌つて聽かす外にはまだ穉い子供に何らの讀書の權能をも認めて呉れなかつた。當時民友社ものを耽讀してゐた若い叔父はただ「夢想兵衛胡蝶物語」一冊しか自由に讀まして呉れぬ。祖父の書架を飾つた古い蘭書の黒皮表紙や廣重や北齋乃至草艸紙の見かへしの濫い手觸り、黄表紙、雨月物語、その他様々の稗史、物語、探偵奇談、佛蘭西革命小説、經國美談、三國志、西遊記等の珍書は羅曼的な兒童の燃えたつ憧憬の情を喚かして遂にはかの嚴格なる禁斷を犯かさしむるに到つた。

私はよく葡萄棚の下に緑いろの日の光を浴びながら新しい紙の匂ひに親しみ、赤い柿

の實の反射にぼやけた草艸紙の平假名を拾つては百舌^{もず}の啼^ねく音をきき耽^ねつた。私は本のひとつひとつの匂ひや色や手觸の異なる毎にそれぞれ特殊なある感覺の悲しみを嗅^かぎわけた。私は梨の木に上つて果實の甘い液にナイフの刃^はをつける時も、ゐもりの赤い腹を恐れて芝くさのほめきに身をひたす時も、赤ん谷^{あか}の婆（母の乳母で髪^{あか}の白いなつかしい老婆だつた）のところ^{やんもも}に山桃採りにゆく時にも、絶えず何らかの稗史を手にしな^あいことは無かつた。私はたゞ感動し、昂奮し、あらゆる稚い空想に耽^ねつた。

ある日の午後圓い玉葱の花に黄色い日光が照りつけて、晝の蟲が幽かにパツチパツチと鳴いてゐる時、私はその上の丘の芝生に寝ころびながら初めて自分の身體から沁み出る強い汗の臭を知つた。さうして軟風のいらいらと葱の臭を吹きおくるたびに私はある異常な靈の壓迫を感じた。かういふ日が續いて私は遂に激しい本能の衝動に驅られた。さうしてその日から非常に晝の太陽を恐るるやうになつた。

愈「春の覺醒^{めざめ}」の時代が來た。さうして赤い青い書籍の手觸りに全官感を慄かしてゐた私はまたその以外の新らしい世界を發見し得た恐怖^{おそれ}と喜びに身も靈も顫はしながら燃えたつ瞳に凡てのものを美しく苦るしくさうして哀しく、寂しく感じ得るやうになつた。さはいへ、私もまた喜怒哀樂の情の激しい一面に極めて武士的な正義と信實とを尊ぶ清らか

な母の手に育てられて、一時は強ひて山羊の血の交じつた怯懦な心に酒を恐れ煙草を惡み、單に懷中鏡を持つてゐたといふ丈けで友人と絶交しかけたほど偽善的な十四の春を迎へた。さうして何時までも女を恐れた。淫らな水郷に育つた私はかうして不思議にも清らかな清教徒としての少年期を了つた。

尤もその偽善的な傾向も長くはなかつた、無意識に壓迫された本然の性情は何時の間にか新らしい反抗の炎を上げた。その苦しい前後に當つて私は激しい神經の衰弱をおぼえた、さうしてただひとり靜かに瞑想し思索する病的な夜の鳥の心になつた。さうして私の少年期の了るころ、常に兄弟のやうに親しんだ友人の一人は自刃して遂にその才氣煥發だつた短い一生の最後を自分の赤い血潮で華やかに彩どつて、たんぽぽのさく野中のひとすぢ道を彼の墓場へ靜かに送られて行つたのである。残された私はまた陰鬱な、そのなかにいらした赤い戲奴^{ヂヤウカア}のやうな心を閉めかす氣の短い感情の激しい二十歳の生活に入つた。さうして若鷺の巢立ちを思はせるやうに忙たゞしく東京をさして上つた。

私が十六の時、沖ノ端^{おき}に大火があつた。さうしてなつかしい多くの酒倉も、あらゆる桶に新らしい金いろの日本酒を満たしたまま眞蒼に炎上した。白い鷺のゐた瀝水、周囲の清らかな堀割、泉水、すべてが酒となつて、なほ寒い早春の日光に泡立つては消防の刺子姿^{さしこ}の朱線に反射した。無数の小さな河魚は酔つぱらつて浮き上り、酒の流れに口をつけて飲んだ人は泥酔して僅に焼け残つた母家^{おもや}に轉がり込み、金箔の古ぼけた大きな佛壇の扉を剥^はがしたり歌つたり踊つたりした。私は恰度そのとき、魚市場に上荷^あげてあつた蓋^{ふた}もない黒砂糖の桶に腰をかけて、運び出された家財のなかにたゞひとつ泥にまみれ表紙もちぎれて風の吹くままにヒラヒラと顫へてゐた紫色の若菜集をしみじみと目に涙を溜めて何時^{いつ}までも何時^{いつ}までも凝視^{みつ}めてゐたことをよく覚えてゐる。

その後以前にも優るほどの巨大な新倉が建ち、酒の名の「潮^{うしほ}」とともに、一時は古い柳河の街にたゞひとり花々しい虚勢を張つてはゐたものの、それも遂には沈んでゆく太陽の斷末魔の反照^{てりかへし}に過ぎなかつた。その十年の短い月日のなかに、廢れてゆくものは廢れ、死んでゆく人は死に、ただひとり古い木版畫の手觸のやうに、残つてゐた懐かしい水郷の風俗も多くは忘られて、たゞ小さな街に残つた氣も狭く口先のみ伶俐なあの眼の狡猾^{こすつか}らしい人士のみが小さな裁判沙汰に生嚼りの法律論を闘はして徒に日をおくるばかり、季節の

變るたびに集まつた旅役者も大方は新顔の陋しい味も風情もないものになつて了つた。さうして食ひつめものの商人は門司、佐世保、大牟田などの新らしい繁華を慕ふて奔り、金齒入れた高利貸は朝鮮にゆき、六騎の活氣ある一團は六十餘艘の小舟に鮫鰯組の旗じるしを翻へしながら遠洋漁業の途にのぼるかして、わかい子弟の東京へゆくものさへ、誰一人この因循な故郷に歸らうとはせぬ。かやうにして街に残されたものは眞菰臭い瀦水に釣を好む樂隱居か、ただ金庫の前に居眠りをして一生を過ぐすあの蒼白い素封家の John - John (良家の息子、やや馬鹿にしていふ言葉である。) かで、追ひ追ひに舊家は廢れ、地方の山持、田地持の類も何時しかに流浪の身となつたものが多い。母の家も祖父の没後よく世にある例の武士の商法とかで、山林に手を出し、地方唯一の名望家として政治屋にまた盛に擔ぎ上げられたが爲めに瞬く間に財産を傾け盡くして、今はあの白い天守の屋根に屋根の艸が秋毎に赤い實をつくる外には、廣い屋敷は見るかげもなく荒れはてて了つた。加之、火災後の長い心勞と疲憊の末、柳河の「油屋」として、九州の古問屋として數代知られた舊家も遂には一家没落の憂き目を見るやうになつた。

私がこの「思ひ出」の編纂に着手し初めたのは、ちやうど郷家の舊い財寶はあの花火の揚る、堀端のなつかしい柳のかげで無慘にも白日競賣の辱しめを受けたといふ母上の身も

世もあられないやうな悲しい手紙に接した時であつた。而して新らしい創作に従つてゐる間に秋となり冬が來て、今はまた晩春の惱ましい氣分に みづまつり 水祭の はやし 囃子や蠶豆の青くさい香ひのそこなく忍ばるゝころとなつた。國よりの通知には愈酒倉は解かれ、親子兄弟凡てあの根ざしの深い「思出の家」から思ひきつて立ち退くべき時機が迫つたといふ事であつた。而して馴れぬ みづしわざ 水仕業に可憐な妹の指が次第に大きく醜くなつてゆきますといふ事であつた。かうしてこの小さな抒情小曲集も今はただ家を失つたわが肉親にたつた一つの おくりもの 贈物としたい爲めに、表紙にも思出の深い骨牌の女王を用ゐ、繪には全く無經驗な癖に首の赤い螢や生膽取や Jhon や Gonshan の漫畫まで挿んで見た、而して心いくまで自分の思を懷かしみたいと思つて、拙いながら自分の意匠通りに装幀して、漸くこの五月に上梓する事となつた。なほこの集に挿んだ司馬江漢の銅版畫は第一回の競賣の際古道具屋の手に依て一旦埃塵溜ごみために投げ棄てられたのをそつと私の拾つて來たものであつて、着色の珍らしい、印象の強い異國趣味のものだつたのが寫眞の不鮮明な爲め全く原畫の風韻を失つて了つたのはこの上もなく残念に思はれる。畢竟私はこの「思ひ出」に依て、故郷と幼年時代の自分とに潔く訣別しやうと思ふ。過ぎゆく一切のものをしてかの紅い天鵝絨葵のやうに凋ましめよ。私の望むところは寧ろあの光輝ある未來である。而して私の凡ての感覺

が新らしい甘藍の葉のやうに生いきとい香ひを放つてゐる「刹那」の狂ほしい氣分のなかに更に力ある人生の意義を見出すことである。終にたつた一人の愛する妹の爲めに、その可憐な十の指の何時までも細くしなやかならんことを切に祈つて置く。

TONKA JOHN.

一九一一、晩春、

東京にて。

序詩

思ひ出は首すぢの赤い螢の

午後ひるすぎのおぼつかない觸覺てきはりのやうに、

ふうわりと青みを帯びた

光るとも見えぬ光？

あるひはほのかな穀物こくもつの花か、

落穂おちほひろひの小唄か、

暖かい酒倉の南で

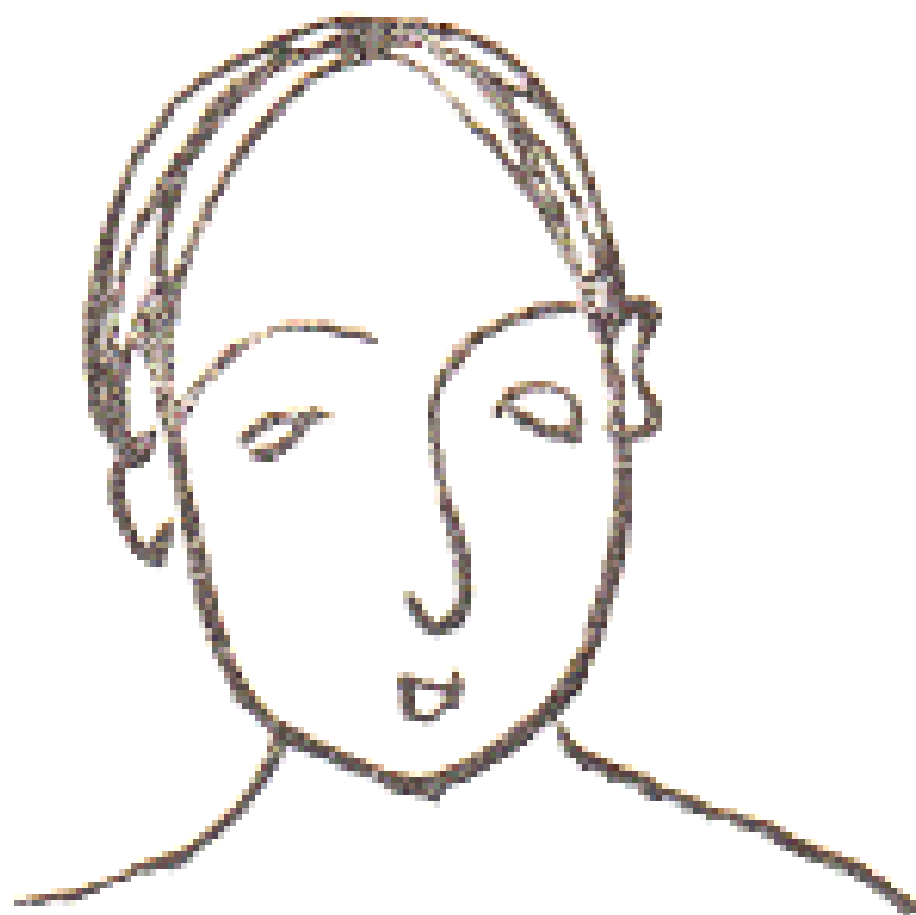
ひき揉むしる鳩の毛の白いほめき？

音色ねいろならば笛ふえの類、

蟾蜍ひきがへるの啼く

醫師の藥のなつかしい晩、

薄らあかりに吹いてるハーモニカ。



Gordham.

匂ならば天鵝絨、
骨牌かるたクインの女王の眼め、

道化たピエローの面の

なにかしらさみしい感じ。

放埒ほうらちの日のやうにつらからず、

熱病のあかるい痛みいたもないやうで、

それでゐて暮春のやうにやはらかい

思ひ出か、たゞし、わが秋の中古傳説レヂエント？

骨牌の女王
童謡

金の入日に繻子の黒

金きんの入日しゆすに繻子の黒――

黒い喪服もふくを身につけて、

いとつつましうひとはゆく。

海のあなたの故郷ふるさとは今日けふも入日のさみしかろ。

夏のゆく日の東京に

茴香うめきやうさう艸の花つけて淡い粉こなふるこのごろを、

ほんに品しなよきかの國のわかい王キングもさみしかろ。

心まなる歌うたひ女めのエロル夫人もさみしかろ。

金きんの入日に繻子の黒、――

黒い喪服もふくを身につけて

いとつつましうひとはゆく。

九月の薄き弱^{よわ}肩^{がた}にけふも入日のてりかへし、
粉^{こな}はこぼれてその胸にすこし黄色くにじみつれ。
金の入日に繻子の黒、
かかるゆふべに立つは誰ぞ。

骨牌の女王の手に持てる花

わかい女王^{クイーン}の手にもてる

黄なる小花ぞゆかしけれ。

なにか知らねど、薤^{しんぺ}赤きかの草花のかばいろは
阿^{アル}留^{カリ}加里をもて色^{いろ}變^かへし愁^{うれ}の華^{はな}か、なぐさめか、
ゆめの光に咲きいでて消ゆるつかれか、なつかしや。

五月ついたち、大^{にんにく}蒜^くの
黄なる花咲くころなれば

忠臣藏の着物きものきて紺の燕も翔るなり、

銀の喇叭に口あててオペラ役者も踊るなり。

されど晝餐ひるげのあかるさに

老嬢オウルドミスの身の薄くナイフ執るこそさみしけれ。

西の女王クイーンの手にもてる

黄なる小花ぞゆかしけれ。

何時かなも哀しくつつましく摘みみて凝視みつむるそのひとの

深き目つきに消ゆる日か、過ぎしその日か、憐憫あはれみか、

老嬢オウルドミスの身の薄くひとりあるこそさみしけれ。

焼栗のほひ

玉乗の兒チヤウカウよ、戯奴ヂヤウカウよ、身振をかしき鈴振りんぷりよ。

また、いはけなき曲馬の兒、

赤き上着^{うはぎ}にとり澄ます銀笛吹きの子らよ。

げにげに汝^{なれ}ら、しをらしく、あるはをかしく、おもしろく、
戯^{たは}れ浮かれて鄙^げびたる下司^{げす}のしらべに忘るれど、
いづこともなき焼栗の秋のほひを嗅ぐときは
物思ふらむ、嘆くらむ、かつは涙もしたたらむ。

すべり轉^{ころ}がる玉の上に、暗き樂屋に、
汗臭^{くさ}き馬の背に、道化芝居の花道に、
玉蜀黍^{とうもろこし}を噛みしむる、收穫^{とりのいれ}の日の
盲^{まうもく}目のわかき女に見るごとく、

物の哀^{あは}れをしみじみと思ひ知るらむ、淺艸の秋の匂に。

黒い小猫

ちゆうまえんだの百合の花、

その花あかく、根はにがし。――

ちゆうまえんだに來て見れば

豌豆のつる逕に匍ひ、

黒い小猫の金茶の眼、

鬼百合の根に晝光る。

べんがら染か、血のいろか、

鹿子^{かのこ}まだらの花瓣^{はなびら}は裂けてしづかに傾きぬ。

裂けてしづかに輝ける褐^{くろ}の花粉^{まぼ}の眩ゆさに、

夜の秘密を知るやとて

よその女のちつと見し昨^{きの}の眼つきか、金茶の眼、

なにか凝視^{みつ}むる、金茶の眼。

黒い小猫の爪はまた

鋭く土をかきむしる。

百合の疲れし球根きゆうこんのその生じろさ、なま薄苦さ、うすにが

掻きさがしつつ、戯れつ、たはむれ

後退りつつ、をのきつ、あとしぎ

なにか探せる、金茶の眼。さが

そつと墮胎したあかんぼの蒼い頭か、あたま金茶の眼、

ある日、あるとき、ある人が生埋うきうめにした私生兒みそかごの

その兒さがすや、金茶の眼、

百合の根かたをよく見れば

燐りんは濕しめりてつき纏まとひ、

球たまのあたまは曝さらされて爪に搔かれて日に光る。

なにか恐るる、金茶の眼。

ちゆうまえんだの百合の花、

その花赤く、根はにがし。――

ちゆうまえんだに來て見れば

なにがをかしき、きよときよとと、

こころ痴^しれたるふところ手、半ば禿^はげたるわが叔父の

歩むともなき獨^{ひとりごと}語ひとり終^{ひねもす}日畑をあちこち。

註　ちゆうまえんだ。わが家の菜園の名なり。

足くび

ふらふらと酒に酔ふてさ、

人形屋の路次を通れば

小さな足くびが百あまり、

薄桃いろにふくれてね、

可^{かは}哀^い相^{さう}に蹠^{あし}には日^{うら}があたる。

馬みちの晝^{あか}の明るさよ、

淺艸の馬道。

小兒と娘

小兒^{こども}ごころのあやしきは

白い小猫の爪かいな。

晝はひねもす、乳^{にゅう}酪^{らく}の匙^{さじ}にまみれて、飛び超えて、

卓^{てえぶる}子^この上、椅子の上、ちんからころりと騒げども、騒げども、

流石^{さすが}、寢室^{ねべや}に瓦斯の火のシンと鳴る夜は氣が滅入ろ：

いつか殺したいいたいな青い小鳥^{はね}の翅^{はね}の音。

娘^{むすめ}ごころのあやしきは

もうせんごけの花かいな。

いつもほのかに薄着^{うすぎ}してしんぞいとう見ゆれども、

晝が晝なか、大^{だい}それた強い魔藥^{まやく}に他^{ひと}こそ知らね、

赤い火のよな針のわな千々に顫えて蟲を捕る、蟲を捕る。
なんぼなんでも殺生な、夜は夜とてくらやみに。

青い小鳥

知らぬ男のいふことに、

青い小鳥よ、櫛の木づくり、わしの寢床が見馴れたら

せめて入日につまされて鳴いておくれよ、籠の鳥、

牛乳が好きなら牛乳飲まそ、

野芹つばなも欲しかろがわしの身體ぢやままならぬ。

何がさみしいカナリやよ、

——よしやこの身が赤い血吐いていまに死なうとそなたは他人。
じつと黙んだ嘴にケレオソートが沁むかいな。

死んだ娘のいふことに、



青い小鳥よ、擔荷たんかの上のわしの姿が見えぬとて
ひとの涙のうしろからちらと鳴くのか、籠かごの鳥、
弔くやむそなたの眞實しんじつは

金の時計か、襟どめか、惜しい指輪の玉である。

何かなしいカナリやよ、

——よしやこの身が解剖ふわけをされて墓へかへろとそなたは他人。
やつといまごろ鳴いたとて死んだ肌はだへがなんで知ろ。

わしの從兄弟いとこがいふことに

青い小鳥よ、櫓の木づくり、おなじ寢どこに三人みたりまで

死ぬる命の驢はなむけに鳴いて暮らすか、籠かごの鳥、

ケレオソートにや馴染なじみもしよが、

いつも馴染まぬ人の眼が今ぢやそなたも厭いやである。

何がせはしいカナリやよ。

——よしやこの身が冷たくなると息が締きれよとそなたは他人。

死なぬさきから鳴かうとままよ、あとの二日でわしも死ぬ……………

みなし兒

あかい夕日のてる坂で

われと泣くよならつばぶし……………

あかい夕日のてるなかに

ひとりあやつる商人あきうどのほそい指さき、舌のさき、

糸に吊つられて、譜につれて、

手足顫はせのぼりゆく紙の人形のひとおどり。

あかい夕日のてる坂で

やるせないぞへ、らつばぶし、

笛が泣くのか、あやつりか、なにかわかねど、ひとすちに

糸に吊られて、音につれて、
手足顫はせのぼりゆく戯け人形のひとおどり。

なにかわかねど、ひとすぢに

見れば輪が泣きしやくる。

たよるすべなき孤兒のけふ日の寒さ、身のつらさ、

思ふ人には見棄てられ、商人の手にや弾かれて、

糸に吊られて、譜につれて、

手足顫はせのぼりゆく紙の人形のひとおどり。

あかい夕日のてる坂で

消えも入るよならつばぶし……………

秋の日

小さいその兒があかあかと

とんぼがへりや、皿まはし……………

小さいその兒はしなしなと身體^{からだ}反^そらして逆^{さか}さまに、

足を輪にして、手に受けて、

顔を踵^{かかと}にちよと挟む、

足のあひだにその顔の坐^{すは}るかなしさ、生^{なま}じろさ。

落^{しづく}つる夕日のまんまろな光ながめてひと雫。

あかい夕日のまんまろな光眺めてまじまじと、

足を輪にして、顔据ゑて、小さいその兒はまた涙。

そば^{そば}にや親爺^{おやぢ}が眞面目^{まじめ}がほ、

鉦^{かね}や太鼓でちんからと、俵くづしの輕業^{かるわざ}の

浮^{はやし}いた囃子^{はやし}がちんからと。

知らぬ他國の瀉海^{がたうみ}に鴨の鳴くこゑほのじろく、

魚市場さかないちばの夕映ゆふばえが血なまぐさそに照るばかり、

人立ちもないけうとさに秋も過ぎゆく、ちんからと。――

小さいその兒がただひとり、
とんぼがへりや、皿まはし……………

人形つくり

長崎の、長崎の

人形つくりはおもしろや、

色硝子……………青い光線ひすぢの射さすなかで

白い埴ねぼつちこねまはし、糊のりで溶かして、砥との粉こを交ぜて、

ついととろりと轆轤ろくろにかけて、

伏せてかへせば頭あたまが出来る。

その頭あたまは空虚うつろの頭、

白いお面めんがころころと、ころころと……………

ころころと轉ころぶお面めんを

わかい男が待ち受けて、

青髯まげの、銀のナイフが待ち受けて、

睚まぶた、睚まぶた、薄う睚まぶたつた睚まぶたを突いて、きゅつと抉えぐつて兩りやう眼がんあける。

晝の日なかにいそがしく、

いそがしく。

長崎の、長崎の

人形つくりはおそろしや。

色硝子……………黄色い光線ひすぢの射すなかで

肥満女ふとつちよの回々ワイワイ教徒きやうとの紅頭巾あかつきん、唾つんぼか、にべもなく

そこらここらと撰んで分けて撮つまむ眼玉は何々ぞ。

青と黒、金と鳶色、魚眼うをめの硝子が百ばかり。

その眼玉も空虚うつろの眼玉、

ちよいとつまんで睨にらへ當あてて

面おもてよく見て、後うしろをつけて、合はぬ眼玉はちよと弾はじき、

ちよと弾はじき

箱はめた、箱はめたよ、兩りやう眼がん箱はめた……………

露西亞ロシヤの女郎衆ロシヤが、女郎おしが義眼いれめをはめるよに、

凄すごや、をかしや、白粉おしろひ刷毛はけでさつと洗おつてにたにたと。

外そとぢや五月つばくちめの燕つばきついついひらりと飛び翔はる。

長崎の、長崎の

人形にんぎょうつくりはおもしろや。

色硝子……………紅あかい血あかのよな日ひのかげで

白髪はくあたまの魔法まほう爺やちが眞面目まじめ顔がほ、じつと睨にらんで、手足てあしを寄よせて、

胴に針金、お面に鬘、寄せて集めて兒が出来る。
兒が出来る。

酷や、可哀や、二百の人形、

泣くにや泣かれず、裸の人形、

赤う膨れた小股を出して、頭みだして、踵を見せて、

鮭の卵か、兒豚の腹か、水子、蛭子を見るがよに、見るがよに、

床に積れて、瞳をあけて、赤い夕日にくわと噎ぶ。

くわと噎ぶ。

人形、人形、口なし人形、

みんな寒かろ、母御も無けりや、賭博うつよな父者もないか、

白痴か、狂氣か、不具か、唾か、墮胎薬を喫まされた

女郎の兒どもか、胎毒か………

しんと黙つてしんと黙つて顫えてゐやる。

傍^{そば}ちや、ちんから目さまし時計、

ほんに、ちんから、目さまし時計、

春の小歌をうたひ出す、

佛蘭西の銀のマーチを歌ひ出す。

長崎の、長崎の

人形つくりはいぢらしや、

いぢらしや。

くろんぼ

くろんぼのまだうらかい母親は

くろんぼの嬰^{みどりご}児^{まろ}の圓い頭^{あたま}を撫でさすり、

乳をのませ、

滑^{すべ}るその手もしなやかに黒い頭^{あたま}を撫でさする。

長崎の異人屋敷の棕櫚の花、

カステラ色の棕櫚の花。

その日あたりに足投げいだし、

ものおもふくろんぼに抱かるる

くろんぼの兒よ。

くろんぼの兒は乳をのみ、

頭あたまをなんとなく撫でらるる快さに

静しずころなくつく呼吸いきの、

出で入る呼吸いきの、

光澤つやのある母の皮膚を、

なめらかなその胸を

また滑なめらかに撫でかへす……………

夏の午過ぎ、ついちろちろと鳥のこゑ、
水平線のかがやきは銀を流して一線に。

母親の夢は何をおもふ。

無心に乳をのむくろんぼの

その兒の、

黒い手のひらに握られて、

しめやかに匍ひいづる

首の赤い一匹の、その螢……………

斷章
六十一

斷章

一

今日もかなしと思ひしか、ひとりゆふべを、
銀の小笛の音もほそく、ひとり幽かに、
すすり泣き、吹き澄ましたるわがこころ、
薄き光に。

二

ああかなし、
あはれかなし、

君は過ぎます、

薫^{くゆり}いみじきメロデアのほひのなかに、

薄れゆくクラリネツトの音のごとく、

君は過ぎます。

三

ああかなし、

あえかにもうらわかきあわが君は、

ひととの芥子の花そが指に、香のくれなゐを

いと薄きうれひもてゆきずりに觸れて過ぎゆく。

四

あはれ、わが君おもふ中オロンの静かなるしらべのなかに、

いつもいつも力なくまぎれ入り、鳴きささやぐ驢馬のにほひよ、
あはれ、かの野邊に寝ねて、名も知らぬ花のおもてに、
あはれ、あはれ、酸^すゆき日のなげかひをわれひとり嗅ぎそめてより。

五

暮れてゆく雨の日の何となきものせはしさに
落したる、さは紅き實^みの林檎、ああその林檎、
見も取らず、冷かに行き過ぎし人のうしろに、
灰色の路長きぬかるみに、あはれ濡れつつ
ただひとつまろびたる、燃えのこる夢のごとくに。

六

あはれ友よ、わかき日の友よ、

今日^{けふ}もまた街^{まち}にいでて少女^{おもて}らに面染^{おもて}むとも、
 な嘲^{あざ}みそ、われはなほわれはなほ心をさなく、
 やはらかき山^{やぎ}羊の乳の香^かのいまも身に失せもあへねば。

七

見るともなく涙ながれぬ。

かの小鳥

在ればまた来て、

茨^{いばら}のなかの紅き實^{ついで}を啄^{いば}み去るを。

あはれまた、

啄^{いば}み去るを。

八

女子よ、

汝^なはかなし、

のたまはぬ汝^なはかなし、

ただ、ひとつ、

一言^{ひとこと}のわれをおもふと。

九

あはれ、日の

かりそめのものなやみなどてさはわれの悲しく、

窓照らす夕日の光さしもまた涙ぐましき、

あはれ、世にわれひとり残されて死ぬとならねど、

わが側^{かたへ}遠く去るとも人のまた告げしならねど、

さなり、ただ、かりそめのなやみなるにも。

十

あはれ、あはれ、色薄きかなしみの葉かげに、
 ほのかにも見いでつる、われひとり見いでつる、
 青き果のうれひよ。

あはれ、あはれ、青き果のうれひよ。
 ひそかにも、ひそかにも、われひとり見いでつる
 あはれその青き果のうれひよ。

十一

酒^{さけ}を注^つぐきみのひとみの
 ほのかにも濡^{うる}れて愁^{うれ}ふる。
 さな病^まみそ街^{まち}のどよみの小夜^{さよ}ふけて遠く沁むとも。

十二

女、汝^なはなにか欲^ほりする。

ゆふぐれの、ゆふぐれのゆめふかきものにほひに、
かくもまた汝^なとともに接吻^{くちつ}けて接吻^{くちつ}けて、接吻^{くちつ}けてほのかにも泣きつつあらば、あはれ、
またなにの願か身にあらむ、ああさるをなほ女、汝^なはなにか欲^ほりする、
ゆふぐれの、ゆふぐれのふたつなき夢のさかひに。

十三

なやましき晚^{おそ}夏^{なつ}の日に、

夕日浴び立てる少女の

餘念^{よねん}なき手にも揉^もまれて、

やはらかににじみいでたる

色あかき爪^{つま}くれなるの花。

十四

わが友よ。

君もまた色青きペパミントの酒に、

かなしみの酒に、

いひしらぬ慰^{なぐさめ}藉^{せき}のしらべを、

今日^{けふ}の日のわがごとくも、

あはれ、友よ、思ひ知り泣きしことのありや。

十五

あはれ君、われをそのごとく

清しとな正しとなおもひたまひそ。

われはただ強ひて清かり。

失せもあへぬそのかみの日の怯^{おく}れたる弱きところに、
ああかなし、われはさは強ひて清かり。

十六

哀^{あはれ}知る女子のために、
われらいま黄^{こが}金^ねなす向^ひ日^{ぐる}葵^まのもとにうたふ。
哀^{あはれ}知る女子のために。

十七

『口^あにな入れそ。』
色^あ紅^かくかなしき蓐^あ葉^かかげより今^け日^ふも呼^よびつる。
『口^あにな入れそ。』

十八

われはおもふ、かの夕ありし音色^{ねいろ}を。

いと甘き梔子^{くちなし}の映^はえあかるにほひのなかに、

埋もれつつ愁ふともなくただひとりありけるほどよ、

あはれ、さは通りすがりのちやるめらの肩をかへつつ、

ひとうれひ——ひいひゆるへうと荷擔^{にかつぎ}夫の吹きもゆきしを。

あはれまた、夕日のなかに消えがてに吹きも過ぎしを。

十九

嗚呼さみし、哀れさみし、

けふ^{みよこおほぢ}今日もまた都大路をさすらひくらし、

なにものか求めゆくとてさすらひくらし、

日をひと日ただあてもなうさすらひくらす。

嗚呼さみし、哀れ^{あは}さみし。

二十

大ぞらに入日のこり、
空いろにこころ顫ふ。

初戀の君おもふ

われの未練^{みれん}ぞ、

あはれ、さは暮れはつるらむ。

二十一

いとけなき女の子に
きかすとはあらねど、
たはむれにきかしぬる

わかき日の歌よ。

わが戀ふる君も知らねば。

二十二

わが友いづこにありや。

おそあき

晩秋の入日の赤さ、さみしらにひとり眺めて、
掻いさぐるピアノの鍵の現なき高音のはしり、
かくてはや、獨身の獨身の今日も過ぎゆく。

二十三

彌古りて、大理石はいよよ眞白に、
彌古りてかなしみはいよよ新らし、
彌古りて彌清く、いよよかなしく。

二十四

泣かまほしさにわれひとり、
冷^ひやき玻^{はり}璃^ど戸に手もあてつ、
窓^{かなた}の彼方はあかあかと沈む入日の野ぞ見ゆる。
泣かまほしさにわれひとり。

二十五

柔かきかかる日の光のなかに、
いまひとたび、あはれ、いまひとたび、
ほのかにも洩らしたまひね、
われを戀ふと。

二十六

蟬も鳴く、ひと日ひねもす、

『かなし、かなし、ああかなし、
今日^{けふ}なほひとり。』

二十七

そを思^もへばほのかにゆかし。

かの古^{ふる}りし朱^{しゆぬり}塗^{ぬり}のうつは、

そがなかに薰^{くゆ}りにし

馬^ま尼^に拉^ら煙^{たばこ}草^こよ。

いつの日のゆめとわかねど。

二十八

あはれ、あはれ、すみれの花よ。

しをらしきすみれの花よ。

汝^なはかなし、

色あかき煉瓦^{かま}の竈^{かま}の

かげに咲く汝^なはかなし。

はや朝明^{あさあけ}の露ふみて

われこそ今し

妹^{いもうと}の骨ひろひにと來しものを。

二十九

青梅^{きん}に金の日光り、

地は濡れて鈴蟲鳴く。

日暮らしの日暮らしの雨の絶間^{たえま}に、

いつしらず鈴蟲鳴く。

三十

あはれ、さはうち鄙^{ひな}びたる

いはけなき玉乗の子が危^{あぶ}なげに足にあはせて、
かすかにも弾き鳴らすオオロン^ひ弾きの少女。

三十一

いまもなほ

ワグネルのしらべに

日をひと日浮身をや寔^{やっ}したまへる。

かなしきは女ぞかし。

離^{さか}り來て野邊^{のべ}におもへば

露くさの花の色だにさはひとり求^とめわぶるなる。

三十二

わが友は色あかき酒を飲みにき、

われはサイダア、

あはれかかる淡^{あは}つけき愁^{うれひ}もて

わかき日を泣かむとする、弱き子の心ぼそさよ。

三十三

あはれ、去年^{こぞ}病みて失せにし

かのわかき辯護士の庭を知れりや。

そは、街^{まち}の角^{かど}の貸家の

褪^{さめ}めはてし飾硝子^{かざりがらす}の戸を覗^{のぞ}け、草に雨ふり、

色紅き罌粟のひともと濡れ濡れて燃えてあるべし。

あはれまた、そのかみの夏のごとくに。

三十四

ああ、あはれ、

青にぶき救世軍の

汚よこれたる硝子戸のまへに

向ひぐるま日葵咲き、

濠ほりばた端を半はんでん纏ひとりペンキ壺さげて過ぎゆく。

いづこにか物賣の笛、

ああ、ひと目——日の夕、

われはいま忙せわしなの電車より。

三十五

縁えん日にちの見世ものの、臭くさき瓦斯おもとにも面うつし、
怪しげの幕のひまより活動寫眞くわつどうの色は透かせど、
かくもまた廉白粉やすおしろひの、人込ひとごみのなかもありけど、
さはいへど、さはいへど、わかき身のすべもなき、涙ながるる。

三十六

鄙ひなびたる鋭き呼子そをきけば涙ながるる。
いそがしき活動寫眞くわつどうしやしん煤すすびたる布に映すと、
かりそめの場末の小屋に瓦斯の火の消え落つるとき、
鄙ひなびたる鋭き呼子そをきけば涙ながるる。

三十七

あはれ、あはれ、

色青き幻燈を見てありしとき、
なになればたづきなく、かのごとも涙ながれし、
いざやわれ俱樂部にゆき、友をたづね、
紅^{くれなゐ}のトマト切り、ウヰスキイの酒や呼ばむ、
ほこりあるわかき日のために。

三十八

瓦斯の火のひそかにも聲たつるとき、
われ、君を悲しとおもひ、
靴ぬぐひの皮に
踵^{つち}なる土蹈みなすなり、
別れ来て、土蹈みなすなり、
ほの黄なるしめり香の、かの苑の香^かを嗅げば、
いまさらに涙ながる……………

三十九

忘れたる、

忘れたるにはあらねども……………

ゆかしとも、戀ひしともなきその人の

なになればふともかなしく、

今日の日の薄暮くれがたのなにかさは青くかなしき、

忘れたる、

忘れたるにはあらねども……………

四十

つねのごと街まちをながめて

ナイフ執り、フォク執り、女らに言葉かはせど、

色赤きキュラソオの酒さかづきにあるは満たせど、
かなしみはいよいよ去らず、

かにかくにわかき身ゆゑに涙のみあふれていでつつ。

四十一

かかるかなしき手つきして、
かかる音にこそ弾きにしか、
かかるかなしきその日の少女。
おとめ

四十二

あかき果は草に落ち、

露に濡れて、

日をひと日戦きぬ、
かくてまた香だに立て得じ。
おのの

雨霽れて、日の射せば、甘く、かなしく、
物求^{あさ}食り、物求^{あさ}食り、寄りも来る音^ねの
レグホンの雄の鶏^{とり}の、あはれそがけたたましさよ。

四十三

葬^{ともらひ}式の歸途^{かへり}にか、戯れに笛吹き鳴らし、
もの甘き靄の内さざめきてたどる樂師^{なれ}よ。

哀れ、汝^{なれ}ら、

薄ぐらき路次の長屋にひと時の後やあるらむ。

さはれなほ吹き鳴らし吹き鳴らし長閑^{のど}に消えつつ、

うら若き服の鄙びのいろ赤く、なにか眺むる。

日はしばし夢の世界に目を放つ、黄金の光。……………

四十四

顔のいろ蒼ざめて
 ゆめ見るごとき眼^{まなざし}眸、
 今日もまたわかき男、
 空をのみ空をのみ見やりて暮らす。

四十五

長き日の光に倦^うみて
 熟^うれし木の果は
 やはらかき吐息^{といき}もて地にぞ落ちたる。
 またひとつ………そよとだに風も吹かねど。

四十六

かなしかりにし昨日^{きのふ}さへ、

かなしかりにし涙さへ、

明日^{あす}は忘れむ、肥満^{ふと}れる君よ。

四十七

廢^{すた}れたる園のみどりに

ふりそそぎ、ふりそそぎ、にほやかに小雨はうたふ。

罌粟^{けし}よ、罌粟よ、

やはらかに燃えもいね……………

四十八

なにゆゑに汝^なは泣く、

あたたかに夕日にほひ、

たんぽぽのやはき溜息^{ためいき}野に蒸して甘くちらばふ。
さるを女、

なにゆゑに汝^なは泣く。

四十九

あはれ、人妻、

ふたつなきフランチェスカの物語

かたらふひまもみどり兒は聲を立てつつ、

かたはらを匍ひもてありく、

君はまた、たださりげなし。

あはれ、人妻。

五十

いかにせむ……………

やはらかに

眼も燃^もえて、

ああ君は

くちびる
唇をさしあてたまふ。

五十一

色赤き三日月。

色赤き三日月。

今日もまた臥床^{ふしど}に

君が兒は銀笛のおもちやをぞ吹く、

やすらけきそのすさびよ。

五十二

柔^{やは}らかなる日ざしに
張^{はりもの}物する女、

いろいろの日ざしに
もの思ふ女、

柔らかなる日ざしに
張^{はりもの}物する女。

五十三

われは怖る、

その宵のたはむれには似もやらで、

なにことも忘れたる

今朝^{けさ}の赤き唇。

五十四

いそがしき葬儀屋のとなり、
驛^{えきてい}遞^りの局に似通ふ兩^{りよう}替^{がえ}のペンキの家に、
われ入りて出づる間^まもなく、
折よくも電車むかへて、そそかしく飛びは乗りつれ。
いづくにか行きてあるべき、
ただひとり、ただひとり、指^さすかたもなく。

五十五

明日^{あす}こそは
面^{かほ}も紅めず、
うちいでて、
あまりりす眩^{まば}ゆき園を、

明日こそは
手とり行かまし。

五十六

色あかきデカメロンの
書^{ふみ}に肱つき、

なにごとをか思ひわづらひたまふ。

わかうどの友よ、

美しくしかかる日の夕暮に、さは疎^{うと}くたれこめてのみ、
なにごとをか思ひわづらひたまふ。

五十七

あはれ、鐵雄、

静かなる汝^なが顔の蒼さよ、
聲もなきは泣きやしつる、
たよりなき闇の夜を
光りて消ゆる花火に。

五十八

ほの青く色ある硝子、

透かし見すれば

内部^{うち}なる耶蘇^{みづし}の龕^{みづし}にひとすぢの香^{かう}たちのぼる。

街^{まち}をゆき、透かし見すれば

日の眞晝ものの静かにほのかにも香たちのぼる。

五十九

薄青き齒科醫の屋に

夕日さし、

ほのかにも硝子は光る。

あはれ、女、

その戸いでていづちにかゆく……………

黄なる陽に汝を見れば

われもまたほの淡き齒痛をおぼゆ。

六十

あはれ、あはれ、

灰色の線路にそひ、

ひとすぢの線路にそひ、

今朝もまた辿りゆく浅葱服のわかき工夫、

汝もまた路のゆくてに

青き花をか求むる、
かなしき長きあゆみよ。

六十一

新詩社にありしそのかみ、
などてさは悲しかりし。
銀笛を吹くにも、
ひとり路をゆくにも、
歌つくるにも、
などてさは悲しかりし。
をさなかりしその日。

過ぎ
し
日

洎芙藍

罇^{ひづ}入りし珈琲^{カウヒワ}碗^{わん}に

洎芙藍^{さふらん}のくさを植ゑたり。

その花ひとつひらけば

あはれや呼吸^{いき}のをのく。

昨日^{きのふ}を憎むころの陰影^{かげ}にも、時に顫えて

ほのかにさくや、さふらん。

銀笛

病弟鐵雄に

思ひ出の夜^よの空の

ほの青き瓦斯^{ガス}の火に、

しみじみと

銀笛の音ぞうれふ。

そこはかと粉雪^{こゆき}ふり、

梅の花黄になげく

その苑^{その}の、

身のいたき衰弱^{おとろへ}や。

罅^{ひび}うすき硝子戸に

肋^{ろく}膜^{まく}のわづらひに、

その胸に、

かの沁みる音はほそし。

寫眞屋の焼あとに

鶯の鳴きつかれ、

珈琲店にまた、
薄荷酒の冷えゆけば、

たましひ
靈の病める手に、

げに一夜、きざまれて、

ひとりまた

音にかつゝのる、そのなげきよ。

函

過ぎし日は鍼醫の手函、

天鵝絨の紫の函、

柔かに手を觸れて、珍らしく

パツチりとひらいた函、舶來の函。

銀かな具のつめたさ、

SOR-BATTEN. びらうどのしとやかさ、

そのびらうどに

薄う光る針。

顫える針をつまんで、

GONSHAN の薄い肌^{はだへ}を刺すところ、

やるせない夏の眞晝のその手つき。

つかれと、かなしみと、ものおもひ、

官能の欲^{よく}……………

こころにくいほど落ちついて

しんみりと刺す盲人^{めくら}の手。

過ぎし日は鍼^{はりい}醫の手函。

天鵝絨びらうどの紫の函、

柔かに手を觸れて、なつかしく、
パツチリと閉しめた函、舶來の函、

註。Sori-batten. 然しながら。方言。阿蘭陀訛？

Gonshan. 良家の娘。柳河語

陰影

なつかしき陰影いんえいをつくらんとて

雛罌粟ひなげしはひらき、

かなしき疲れを求めんとて

女は踊る。

晴れやかに鳴く鳥は日くれを思ひ、
蜥蜴とかげは美しくくふりかへり、

時計の針は薄らあかりをいそしむ……………

とら
捉へがたき過ぎし日の 歡^{くわんらん}樂^{らく}よ、

あいしゆう
哀^{あい}愁^{しゆう}よ、

すべてみな、かはたれにうつしゆく

薄青きシネマのまたたき、

いそがしき不可思議のそのフィルム。

げにげにわかき日のキネオラマよ、

思ひ出はそのかげに伴奏^{つれひ}くピアノ、

月と瓦斯との接吻^{キス}、

ろうぎん
瓏銀の水をゆく小舟。

なつかしき陰影をつくらんとて

ひなげし
雛罌粟は顫へ、

かなしき疲れを求めんとて
女は踊る。

淡い粉雪

Tinka John 作

淡い^{あは}粉雪はブリツキの
薄い光に消えてゆく、
オールドミス^{オールドミス}
老嬢のさみしさか、
青いその日も消えてゆく。

※倉のほめき

思ひ出は※倉^{こくぐら}の挽^{ひき}臼^{うす}の上に

ぼんやりと置きわすれたる蠟燭の火か、

黄いろなる蠟燭の火は

かりむぎ

苳麥と七面鳥の卵とに陰影かげをあたへ、

いたづらもの

惡戯者の二十日鼠にうちわななく。

柔かに鳴く聲は物もの忘れゆく女のごとく、

薄あかりする空窓そらまどの硝子より、

ふけゆく夜よるのもののねをやかなしむ。……

黄いろなる蠟燭のちろちろ火。

いまだに大人おとなびぬ TONKA JOHN のいづろは

かの※物こくもつの花にかくれんぼの友をさがし、

暖かにのこりたる祭まつりのお囃子はやしにききふける……………

さみしき曙の見える

顔青き乞食らのさし覗かぬほどぞ、

しづやかに燃え盡きむ

美しくき蠟燭のその涙……………

註 Tonka John. 大きい方の坊つちゃん、弟と比較していふ、柳河語。

殆どわが幼年時代の固有名詞として用ゐられたものなり。

人々はまた弟の方を Tinka John と呼びならはしぬ。阿蘭陀訛？

初戀

薄らあかりにあかあかと

踊るその子はただひとり。

薄らあかりに涙して

消ゆるその子もただひとり。

薄らあかりに、おもひでに、

踊るそのひと、そのひとり。

泣きにしは

美はしき、そは兎^とまれ、人妻よ。

ほのかにも唇^{くち}ふれて泣きにしは、

君ならじ、我^わならじ、その一夜^{ひとよ}。

青みゆく蠟^{ろう}の火と月光^{つきかげ}と、

瞬間^{たまたま}にほのぼのとくちつけて

消えにしを、落ちにしを、その一夜。

さるになど光ある御空より

君はまた香^かを求め泣き給ふ。

あな、あはれ、その一夜、泣きにしは

君ならじ、そのかみのわが少女。

薊の花

けふあさみ
今日も薊の紫に、
とげ
刺が光れば日は暮れる。
いつ
何時か野に來てただひとり
としま
泣いた年増がなつかしや。

カスネテラ

ふち
カステラの縁の澁さよな、
かばいろ
褐色の澁さよな、
こな
粉のこぼれが眼について、
ほろほろと泣かるる。
まあ、何とせう、
赤い夕日に、うしろ向いて
ひとり植ゑた石竹。

散歩

過ぎし日のおもひでに

植物園を歩^{ある}行けば、

霜白く、薄^{うす}黄水仙の芽も青く、

鳴く鳥すらもほのかなれや、佛蘭西の赤靴……………

骨牌^{トランプ}のこころもちに

クロウバのうへをゆけば

朝はやく、あるかなきかの香^かも痒^{かゆ}く、

鳴く蟲すらもほのかなれや、佛蘭西の赤靴……………

かの蒼^{あお}白^{しろ}き年^{とし}増^まを

恐れて、そつと歩めば、

日は光り、いまだ 茴うゐきやう香の露も苦にがく、
鳴くこころすらもほのかなれや、佛蘭西の赤靴……………

隣りの屋根

夕まぐれ、たれこめて珈琲のほひに噎むせび、
古ぼけし和蘭陀自鳴鐘取りおろし拭きつつあれば
黄に光るザボンの實ぽつかりと夕日に浮び、
黒猫はひそやかにそのかげをゆく……………

あたたかき足跡のつづきゆく瓦の塵よ。

風重きかの屋根に香濃にほひき艸こそなけれ。

りゆく日のあゆみたまゆらに明あかると見つつ、
過ぎし日のやるせなき思ひ出はまたりかげゆく。

見果てぬ夢



$\sqrt{14}$	I
$\sqrt{15}$	II
$\sqrt{16}$	III
$\sqrt{17}$	IV
$\sqrt{18}$	V
$\sqrt{19}$	VI
$\vdots$	VII

四

手紙の付
 のちのち
 しすよ。

畫 二 畫 二

27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
86



過ぎし日のしづこころなき口笛は
日もすがら葦の片葉の鳴るごとく、
ジブシイの晝のゆめにも顫ふらん。
過ぎし日のあどけなかりし^{かなしみ}哀愁は
こまやかに^{にはひ}匂シヤボンの消ゆるごと
目のふちの青き^{としま}年増や泣かすらん。
過ぎし日のうつつなかりしためいきは
^{うす}淡ら雪赤のマントにふるごとく、
おもひでの襟のびらうど身にぞ沁む。
吹き馴れし銀の^{ぎん}ソプラノ身にぞ沁む。
過ぎし日の、その^{よる}夜の、言はで過ぎにし片おもひ。

高機

たかはた
高機に

梭投げぬ。

きりはたり。

その胸に

梭投げぬ。

きりはたり。

高機に、

その胸に、

きりはたり。

歌ひ時計

けふもけふとて氣まぐれな、

晝の日なかにわが涙。

かけて忘れたそのころに
銀の時計も目をさます。

朝の水面

朝の水面みのもの燐いぶしぎん銀

泣けばちらちら日が光る。

わしがこころの燐いぶしぎん銀、

けふもさみしくちらちらと。

青いソフトに

青いソフトにふる雪は

過ぎしその手か、ささやきか、

酒か、薄荷^{はっか}か、いつのまに
消ゆる涙か、なつかしや。

意氣なホテルの

意氣なホテルの煙^{けむ}突^{だし}に

けふも粉雪のちりかかり、

青い灯^ひが點^つきや、わがこころ

何時^{いつ}もちらちら泣きいだす。

霜

柔かなる月の出に

生^{なま}じろき百合の根は匂ひいで、

鴉の鳴かで歩みゆく烟、

その畑に霜はふる、銀の薄き疼痛………

過ぎし日は苦き芽を蒔きちらし、

沈黙はうしろより啄みゆく、

虎列拉病める農人の厨に

黄なる灯の聲もなくちらつけるほど。

霜はふる、土龍の死にし小徑に、

かつ黒き鳥類の足あとに、故郷のほひに、

霜はふる、しみじみと鍼をもてかいさぐりゆく

盲鍼醫の觸覺のごと、

思ひ出の月夜なり、銀の痛き鍍金に、

薄青き光線の暈かけて慄く夜なり。

放埒のわが悔に、初戀の清き傷手に、

秘密おほき少年のファンタジヤに。

霜はふる。

ややにふる、

來るべき冬の日の 幻チスイリユジョン 滅

.....

時は逝く

時は逝く。赤き蒸汽の船腹ふなばらの過ぎゆくごとく、

※倉こくぐらの夕日のほめき、

黒猫の美しくしき耳鳴みみなりのごと、

時は逝く。何時しらず、柔やはらかかに陰影かげしてぞゆく。

時は逝く。赤き蒸汽の船腹ふなばらの過ぎゆくごとく。

おもひで



john.

紅き實

日もしらず。

ところもしらず。

美しくう稚兒ちごめくひとと

匍もひ寄りて、

桃ももか、IKURI か、

朱しゆの盆ぼんに盛りつとまでを。

餘よは知らず、

また名もしらず。

夢なりや。――

さあれ、おぼろに

朱の盆に盛りつとまでを、

わが見しは

紅き實なりき。

註。IKUの果は巴丹杏より稍小さく、杏よりはすこしく大なり、その色血のごとし。

車上

春の夜^よなりき。さくらびと

月の大路^{おほち}へ戸を出でぬ。

燈^ひあかき街^{まち}の少女らは

車かこめり、

川のふち

霧美しくうそぞろぎぬ。

美^よき人なりき、花ごろも

かろく被^{かつ}ぎて、——母^{はは}ぎみの

乳の香も薫ゆり、——薔薇のごと
われをつつみぬ。

ひとあまた、

あとの車もはなやぎぬ。

いづれ、月夜の花ぐるま、

憂き里さりて、野も越えて、

常うるはしき追憶の

國へかゆきし。——

稚子なれば

はやも眠りぬ、その膝に。

身熱

母なりき、

われかき抱き、

ザボンちる薄き陰影^{かげ}より

のびあがり、泣きて透^すかしつ、

『見よ、乳母の棺^{ひつぎ}は往^ゆく。』と。

時に白日^{ひる}、

おほち
大路青^{あお}ずみ、

白き人列^{つら}なし去んぬ。

刹^{せつ}那、また、火なす身熱、

なべて世は日さへ爛^{たぐ}れき。

病むごとに、

母は歎^なきね。

『身熱に汝^なは乳母焦がし、

また、JOHNよ、母を。』と。——今も

われ青む。かかる恐怖^{おそれ}に。

梨

ひと日なり、夏の朝涼^{あさすず}、

濁^{にごり}酒^{ざけ} 賣^やる家の爺^{をぢ}と

その爺^{をぢ}の車に乗りて、

市場へと。——途^{みち}にねむりぬ。

山の街^{まち}、——珍^{めづ}ら物見の

子ごころも夢にわすれぬ。

さなり、また、玉名^{たまな}少女が

ゆきずりの笑^{えみ}も知らじな。

その歸き、木々のみどりに

眼醒^{めさ}むれば、鶯啼^さけり。

山路なり、ふと掌^てに見しは
梨なりき。清^{すい}しかりし日。

鶏頭

秋の日は赤く照らせり。

誰が墓ぞ。風の光に

鶏頭の黄なるがあまた

咲ける見てけふも野に立つ。

母ありき、髪^{かみ}のほつれに

日も照りき。み手にひかれて

かかる日に、かかる野末を、

泣き濡れて歩みたりけむ。

ものゆかし、墓の鶏頭。

さきの世^よか、うつし世にてか、

かかる人ありしを見ずや、

われひとり涙ながれぬ。

椎の花

木の花はほのかにちりぬ。

日もゆふべ、椎の片岡、

影さむみ、薄ら光に

君泣きぬ、われもすがりぬ。

髪^{きぬ}の香か、目^ま見のうるみか、

衣^{きぬ}そよぎ、裾にほそぼそ、

虫啼きぬ、——かかるうれひに。

ああ、かくて、君よいくとき、
かくすが縫り、かくや泣きけむ。
そのかみか、いまか、うつつか、
さて知らじ、さきの世のゆめ。

男の顔

ふと見てし男の顔は
夜よめ目ながら赤く笑ひき。

そことなく、囃はやし子きこえて
水みづまつり祭 ふけし夜のほど、
乳母の背せにわれねむりつつ、
見るとなく彼を憎みぬ。

その顔は街まちの灯かげを、

あかあかと歩みつつあり。

乳母もさは添ひてかたりぬ。

かくて世よにわれただひとり。

おほだいこ大太鼓人は拊うちつけ

うしろ後より絶えず戯おどけて

嘲りぬ。――われは泣きにき。

水ヒアシンス

月しろか、いな、さにあらじ。

薄ら日か、いな、さにあらじ。

あはれ、その灰ほののにほひの

などもさはいまも身に沁む。

さなり、そは薄き香^かのゆめ。

ほのかなる暮^{みぎは}の汀^はを、

われはまた君が背^せに寝て、

なにうたひ、なにかかたりし。

そも知らね、なべてをさなく

忘れし日にはあれども、

われは知る、二人^{ふたり}溺れて

ふと見し、水ヒアシンスの花。

鷺鳥と桃

なにごとのありしか知らず、

人さには立ちてながめき。

われもまた色あかき桃
掌てにしつつ、なかにまじりぬ。

河口に今日しはじめて
小蒸汽の見えつるといふ。

朝あさ明あけの霧にむせびし
西にし國くにの新しき香かよ。

そが鈍にぶき笛のもとより、
鷺の鳥は鳴きてのぼりぬ。

ひとむれのその鳴きごゑよ、
しらしらとわれに寄り來つ。

そはかなし、『見も知らぬ兒よ、
汝が紅き實を欲し。』といふ。

いひしらぬそのくちをしき、
逃げまどひ、泣きてかへりぬ。

母上に賜^たびし桃の實、
われひとり食^{たう}べむものを。

胡瓜

そのにほひなどか忘れむ。
ほのじろき胡瓜^{きうり}の花よ。
そのひと日、かげにかくれて
わが見てし胡瓜の花よ。

かの日には歌舞伎見るとて
父上にせがみまつりき。

そがために小さき兄弟はらから

日をひと日家を追はれき。

弟は水の邊^へに立ち、

聲あげて泣きもいでしか。

われははた胡瓜の棚に

身をひそめすすり泣きしき。

かくしても幼き涙

頬にくゆるしばしがほどぞ、

珍^{めづ}らなる新らしき香に

うち噎^{むせ}びなべて忘れつ。

さあれ、かの痛^つらき父の眼^め
たまたまに思ひいでつつ、
日をひと日、泣きも疲れて
數へ見てし胡瓜の花よ。

源平將基

春の夜の源平將基、
あはれなほ思ひぞ出づる。
ただ一夜^{ひとよ}あてにをさなく
ほのかにも見てしばかりに。

その君はわれとおなじく
かぶろ髪、ゆめの眸^{まみ}して

紅^{くれなゐ}の玉をとらしき。

われは白、かくて對^{むか}ひぬ。

春の夜の源平將某、

そののちは露だにあはず、

名も知らず、われも長じて
二十歳^{はたとせ}の春にあへれど。

などかまた忘れはつべき。

紅のとらす玉ゆゑ、

いとけなく勝たせまつりし

そのかみの春の夜のゆめ。

朝

日は臯月、
さつき

小野のしら花、

鈴状すずなりに咲きて夜あけぬ。

静しずかなり、ひとり坐れば。

静なり、ひとり坐れば。――

くるる戸の

きしるにほひも。

君は早や、

麥の青みを――

鈴鳴らし朝の禱いのりに、――

白しらぎぬに摺りもこそゆけ、

白ぎぬに摺りもこそゆけ、

野の寺へ。――

かくも思ひぬ。

ああしばし、

星のうすれに、

髪なぶる風のなよびも、

水鳥のほののしらべも、

水鳥のほののしらべも、

われききぬ。

きみがこころも。

人生

野の皐月^{さつき}、空ものどかに、

白き雲ゆるかにわたり、

畑にはからし花咲き、

雲雀また妙^{たへ}にうかびぬ。

南向く白き酒倉、

そがもとにわれはその日も、

幟^{のぼり}立つ野の末ながめ

ゆめのごとむきし佛^{ぶしゆかん}手柑。

かすかにも囃^{はやし}子はきこえ、

笛まじり風もにほへど、

父のまたゆるしたまはぬ

歌舞^{かぶき}伎見^みをなにとかすべき。

かくてまたすすり泣きつつ、

實をひとり吸ひもてゆけば

酸^すゆかりき。あはれ、それより

われ世をば厭ひそめにき。

青き甕

青き甕にはよくコレラ患者の死骸を入れたり、これらを幾個となく擔ぎゆきし日のいかに恐ろしかりしよ、七歳の夏なりけむ。

『青甕ぞ。』——街衢に聲す。

大道に人かげ絶えて

早や七日、溝に血も饅え、

惡蟲の羽風の熱さ。

日も眞夏、火の天爛れ、

雲燥りぬ。——大家の店に、

人々は墓なる恐怖。

香くすべ、青う寢そべり、

煙管とる肱もたゆげに、

蛇のごと眼のみ光りぬ。

『青甕あをがめぞ。』——今こそ家族やから、

『聲す。』『聴け。』『血糊ちのりの足音あのと。』

『何もなし。』——やがて寂寞。——

秒ならず、荷擔夫にかつぎ一人、

次に甕かめ、（これこそ死骸むくろ、）

また男。——がらす戸透かし

つと映る刹那——眞青まぎをに

甕なるが我を睨みぬ。

父なりき。——（父は座ざにあり。）——

ひとつ眼の呪咀のろひの光。

『青甕あをがめぞ。』——日もこそ青め、

言葉なし。——蛇のとぐろを

香匐^{かうは}ひぬ、苦熱^{いふき}の息吹。

また過ぎぬ、ひひら笑ひぬ。

母なりき。——（母も座^ざにあり。）——

がらす戸の冷^{つめ}たき皺^{しわ}み。

やがてまた一列、——あなや、

我なりき。——青き小甕^{さぐ}に、

歎^{さぐ}歎^{さぐ}りつつ黒き血吐くと。

刹那^{おそれ}見ぬ、地獄の恐怖。

赤足袋

肩越しにかゝふ子らに、

沙彌^{しゃみ}が眼^めはなべて光りぬ。——

日の一時、水無月まなか、

大なる 鐙ねうはち 鉞ひびき、

亡者まうじや めく人びとあまた

香爐焚き、棺衣がけむく めぐり、

群れつどひ、兩手もうて あはせぬ。

長老は拂子ほつす しづしづ

誦經ずきやう いま、咽ね び音まじり、

廣澄ひろす みぬ。——七歳ななつ の我は

興なさに、此時膝に

眼うつせば、紗しゃ の服がくれ、

だぶだぶの赤足袋。——をかし、

髯ひげ づらに涙ながれき。

『南無阿彌陀。』——沙彌しゃみ が眼光り、

拂子ほつす ゆれ、風湧く刹那、

一齊に念佛起り、

老若も、男女も、子らも、

赤足袋も、咽むせぶと見れば、

層きはだ高かうの銅拍子どうびやうし、——あなや、

われ堪へず、——笑ひくづれき。

挨拶

祭まつりの日、美しくき人も來ましき。

稚き女の友もあつまりぬ。

あるは、また、馬うまに騎のりりて、

物むつかしき武士さむらいの爺おぢも來ましき。

樂しかる祭なれども、

われはただつねにおそれぬ。

まつり
祭の日、むつかしき言のかずかず

あひしら
挨拶ひ、父は笑ましき、

はげあたま
禿頭 するするとかきあげながら――

われもまた爲ではかなはじ、かのごとも大人とならば。

まつり
樂しかる祭なれども、

われはただつねにおそれぬ。

あかき林檎

いと紅き林檎の實をば

あす
明日こそはあたへむといふ。

さはあれど、女の友は

いつ
何時もそを持ちてなかりき。

いと紅き林檎の實をば

明日こそはあたへむといふ。

恐怖

乳母なれどわれは恐れき。

夜も晝も『和子よ。』と歔歔^{さぐ}り、

『骨だちぬ。』われを『死なば。』と、

母よりも激しき愛に、

抱擁^{だきし}めつ。——『かなし。』とばかり。

乳母なれど、せちに恐れき。

執^{しふちやく}着^{いまは}よ、臨終の刹那、

涙なき老^{おい}の眼^{まなこ}は、

母よりも激しき愛に

我みつめ——青く白みき。

乳母なれど、いまでも恐れぬ。

疑問^{うたがひ}に悲しみ亂れ、

わが泣けば馴^な寄り水如^なし、

『吾子^{あこ}よ、吾^あぞ。』（夜は二時ならし。）

『汝^なが母。』と——青き顔しぬ。

乳母の墓

あかあかと夕日てらしぬ。

そのなかに乳母と童と

をかしげに墓をながめぬ。

その墓はなほ新らしく、

畑中の南瓜の花に

もの甘くしめりにほひき。

乳母はいふ、『こはわが墓』と、

『われ死なばここに彫りたる

おのが名の^{したやみ}下^{うみ}聞にこそ。』

三^{みとせ}歳のち、乳母はみまかり、

そのごともここに埋^うもれぬ。

さなり、はや古びし墓に。

あかあかと夕日さす野に、

^{かぼちやばな}南瓜花をかしき見れば

いまもはた涙ながるる。



36-5"
乳母ト
John ト.

生の芽生



石竹の思ひ出

なにゆゑに人々ひとびとの笑ひしか。

われは知らず、

え知る筈なし、

そは稚いとけなき三歳のむかしなれば。

暑き日なりき。

物音もなき夏の日のあかるき眞晝なりき。

息ぐるしく、珍らしく、何事か意味ありげなる。

誰たが家か、われは知らず。

われはただ老ヂイ爺ヤンの張れる黄色かりし提ちやう燈ちんを知る。
目のわるき老バン婆ンの土間にて割さきつつある

青き液^{しる}出す小さな貝類のにはひを知る。

わが悩ましき晝寢の夢よりさめたるとき、

ふくらなる或る女の兩手は

弾機^{ばね}のごとも慌^{あは}てたる熱^{あつ}き力もて

かき抱き、光れる掾側へと連れゆきぬ。

花ありき、赤き小さき花、石竹の花。

無邪氣なる放尿……………

幼兒は靜ころなく凝視^{みつ}めつつあり。

赤き赤き石竹の花は痛^{いた}きまでその瞳にうつり、

何ものか、背後^{うしろ}には擦^{こそ}ゆし、繪艸紙の古ぼけし手^て觸^ふにや、

なにごとの可笑^{をか}きぞ。

數多^{あまた}の若き漁^{ロツキ}夫と着物^{きもの}つけぬ女との集まりて、

珍らしく、恐ろしきもの、
それを見むと無益にも靈動^{たまし}かす。

柔らかき乳房もて頭^{かうべ}を厭され、

幼兒は怪しげなる何物をか感じたり。

何時^{いつ}までも何時^{いつ}までも、五月蠅^{うるさ}く、なつかしく、やるせなく、

身をすりつけて女は呼吸^{いき}す、

その汗の臭^{におひ}の強さ、くるしさ、せつなさ、

恐ろしき何やらむ背後^{うしろ}にぞ居れ。

なにゆゑに人々^{ひと}の笑ひつる、

われは知らず、

え知る筈なし、

そは稚き三歳の日のむかしなれば。

暑き日なりき、

物音もなき 鹹河しほがはの傍そばのあかるき眞晝なりき。

蒸すが如き幼年の恐怖おそれより

尿いばりしつつ……われのただ凝視みつめてありし

赤き花、小さき花、目に痛いたき石竹の花。

幽霊

覺醒めさむれば

しんしんと水の音ね近し、

わが乳母の心音しんのんかそは

夜よは暗く……耳鳴す……青葱畑……

いづこにか夜芝居の篠しのきこゆ、本釣ほんつりきこゆ、

恐ろしき道すがらその肩にかぢりつき、

手をのべてからめども、首すぢは『お岩』のごとく、
髪のけの青かりしかな、にら 蕤むせびの香の噓さへしつ。

月もなく、星もなし、

然れども或るものは戯たはむれのごと

黄なる毛のにほひして走り過ぐ――

わが乳母の魂たまぎりし聲、

ゆくりなく、眼めに入りし

蒼き火の光なき幻まぼろし影。

銀色の憂鬱に、夜は青く輝かがやきわたり、

しんしんと水の音冴えつ。

倒れしは、わが乳母か、息絶えしその背せより

ふと見れば

幽霊は冷ひややかにほほゑみぬ。――あなやそは乳母。

願人坊

雪のふる夜よの倉見れば

ぐわんにんぼう

願人坊を思ひ出す。

願人坊は赤頭巾あかづきん、

目も鼻もなく、眞白な

のつぺらぼんの赤頭巾。

「ちよぼくれちよんがら、そもそもわつちが

のつぺらぼんのすつぺらぼん、すつぺらぼんののつぺらぼんの、

坊主になつたる所謂いはくいんねん因縁いんねんきいてもくんねへ、

しかも十四のその春はじめて」……………

をど踊り出したる悪玉あくだまが

願人坊の赤頭巾。

かの雪の夜の酒宴に、

我が顫へしは恐ろしきあるものの面、「色のいの字の」

白き道化がひと踊り………

乳母の背なかに目を伏せて

恐れながらにさし覗き、

淫らがましき身振をば幽かにこころ疑ひぬ、

なんとなれどおもしろく。

「お松さんにお竹さん、椎茸さんに干瓢さんと………手練手管」が何ごとか知らぬ

その日の赤頭巾、

悪玉踊の變化もの。

雪のふる夜の倉見れば

願人坊を思ひ出す。

雪のふる夜に、戯けしは

さかやをとこ

酒屋男の尻かろの踊り上手のそれならで、

もつとみにく

最も醜く美しく饑ゑてひそめる 仇敵、

あだがたき

おのが身の淫ごころと知るや知らずや。

たはれ

あかんぼ

昨日うまれたあかんぼを、

きのふ

その眼を、指を、ちんぼこを、

まなつまひる

眞夏眞晝の醜さに

にく

憎さも憎く睨む時。

何かうしろに來る音に

なに

はつと恐れてわななきぬ。

『そのあかんぼを食べたし。』と
黒い女猫めねこがそつと寄る。

ロンドン

夏の日向ひなたにしをれゆく
ロンドン草さうの花見れば
暑き砂地にはねかへる
蟲のさけびの厭はしや。

かつはさみしき唇くちびるに
カステラの粉をあつるとき、
ひとりとくとく乳ちちねぶる
あかんぼの頭あたまにくらしや。

夏の日向にしをれゆく

ロンドン草よ、わがうれひ。

松葉牡丹のことをわが地方にてロンドンと呼びならはしぬ。その韻いまもわすれず。

接吻

臭^{にほひ}のふかき女きて

身體^{からだ}も熱^{あつ}くすりよりぬ。

そのときそばの車百合

赤く逆^{のぼ}上せて、きらきらと

蜻蛉^{とんぼ}動かず、風吹かず。

後退^{あとし}ざりしつつ恐るれば

汗ばみし手はまた強く

つと抱きあげて接吻^{くちづ}けぬ。

くるしさ、つらさ、なつかしさ、
草は萎れて、きりぎりす
暑き夕日にはねかへる。

汽車のにほひ

汽車が来た、——釣鐘草つりがねさうのそばに、
何時いつも羽蟻はありが飛び、
黄色きいろい日があたる。

JOHN は母上じんりきと人力車に。——

頭あたまのうへのシグナルがカタリと下る。面白いな。

もうと啼く牛のこゑ、
ステーション
停車場の方に白い夏服なつぷくが光り、
激しい大麥にほひの臭のなかを、

汽車が来る………眞黒な鐵の汗あせの
靜まらぬとどろき、とどろき、とどろき………

汽車が奔る………眞面目な兩の眼玉から
ひぐるま

向日葵見たいに夕日を照りかへし、

焦れつたいやうな、泣くやうな、變に熱い噎あつむせびを吹きつける。

油じみた皮膚のお化ばけの

西洋のとどろき、とどろき、とどろき、とどろき………

汽車が消ゆる………ほつと息をして

釣鐘草が汗をたらし、

生れ變つたやうな日光のなかに、

停とまつた人力車が動き出すと、

赤い手をしたシグナルがカタリと上る。面白いな。

どんぐり

どんぐりの實^みの夜^よもすがら
落ちて音するしをらしさ、

君が乳房に耳あてて

一^{ひと}夜ねむればかの池に。

どんぐりの實はかずしれず

水^{おもて}の面に唇つけぬ

お銀小銀のはなしより

どんぐりの實はわがゆめに。

どんぐりの實のおのづから

熟^うれてなげくや、めづらしく、

祭物^{まつりもの}見の前の夜^よを

二人ねむれば、その胸に。

どんぐりの實のなつかしく
落ちてなげけば薄^{うす}あかり、
かをる寢息^{ねいき}のひまびまや、
どんぐりの實は池水に。

赤い木太刀

赤い木太刀をかつぎつつ、

JOHNはしくしく泣いてゆく。

水天宮のお祭^{まつり}が

なぜにこんなになしかる。

悲^{かな}しいことはなけれども、

行儀ただしく、人なみに

御輿みこしのあとに従へば、

金きんの小鳥のヒラヒラが

なぜか、こころをそそのかす。

街まちは五月の入日どき、

覗のぞき眼鏡めがねがとりどりに

店をひろぐるそのなかを、

赤い木太刀をかつぎつつ、

JOHN はしくしく泣いてゆく。

糸車

糸車、糸車、しづかにふかき手のつむぎ

その糸車やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。

金と赤との南瓜きん たうなすのふたつ轉ころがる板まの間に、

「共同醫館」の板まの間に、

ひとり坐りし留守番るすばんのその媼おうなこそさみしけれ。

耳ほのもきこえず、目も見えず、かくて五月となりぬれば、

微ほのかに匂ふ綿くづのそのほこりこそゆかしけれ。

硝子戸棚に白骨はつこつのひとり立てるも珍めづらかに、

水路すゐろのひとり月光ななめの斜さに射すもしをらしや。

糸車、糸車、しづかに黙もだす手の紡つむぎ、

その物ものおもひ思おもひやはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。

水面

ゆふべとなればちりかかる

柳こなの花粉ななのうすあかり、

そのかげに透く水面こそ
けふも *Ongo の眼つきすれ。

またなく病めるおもちの
君がここにあまゆれば、
渦のひとつは色變えて
生膽取の眼を見せつ。
いきぎもとり

恐れてまたも凝視むれば
銀の *Benjo のいろとなり、
ハーモニカとなり、櫂となり、
またもかの兒の眼となりぬ。
め

柳の花のちりかかる
樋のほとりのやんま釣り、
みび

ひとりつかれて水面^{みづのも}に
薄くあまゆるわがこころ。

Ongo. 良家の娘、小さき令嬢。柳河語。

Benjo. 肌薄く、紅く青き銀光を放つ魚、小さし。同上。

毛蟲

毛蟲、毛蟲、青い毛蟲、

そなたは何處^{どこ}へ匍^はふてゆく、

夏の日くれの磨硝子^{すりガラス}

薄く曇れる冷^{つめ}たさに

幽^{かすかすか}に幽^{はら}にその腹部の透^{つた}いて傳^{つた}はる美しさ。

外の光のさみしいか、

内の小笛のこひしいか、

毛蟲、毛蟲、青い毛蟲、

そなたはひとり何處へゆく。

かりそめのなやみ

ゆく春のかりそめのなやみゆる

びいどろの薄き鑊に

肉桂水につけいを入れて欲ほし、

カステラの欲し。

鉛の汽車の玩具おもちゃは

紫の目に痛いたし。

銀紙ぎんがみを透かせば黒し、

わが乳母の乳ちちくびも汚きたなし。

硝子戸に日の射させば

ザボンの白い花ちりかかり、
なんとなう温かうして心空^{ひも}腹じ。

カステラをふくみつつ、その黄いろなる、
われはかの君をぞ思ふ、

柔かき手のひらのなつかし。
小^{ちい}さきその肩のなつかし。

かかる日に、かかる日に、
からし菜の果^みをとりにて泣く人の
その肩に手を置きて、

手を置きて、ただ何となく寄り添ひてまし。

道ぐさ

芝くさのにほひに

夏の日光り、

幼年のころに

* Wasiwasi 啼く。

伴^{つれ}にはぐれて

うつとりと、

雪駄ひきずる

眞晝どき。

汗ばみし手に

羽蟲きて、

赤き腹部^{はら}すり、また、消ゆる

藍色の眼^めの美しくしや。

つかず離れぬ^{はな}
その恐怖^{おそれ}、

たらたら坂を
またのぼる。

芝くさのにほひに

夏の日光り、

幼年のころに

Wasiwasi 啼く。

* 油蟬の方言

螢

夏の日なかのヂキタリス、
釣鐘^{つりがねがた}状に汗つけて

光るころもいとほしや。
またその陰影^{かげ}にひそみゆく
螢のむしのしをらしや。

そなたの首は骨牌^{トランプ}の

赤いヂヤツクの帽子かな、

光るともなきその尻は

感冒^{かぜ}のここにほの青し、

しをれはてたる幽霊か。

ほんに内氣^{うちき}な螢むし、

嗅^かげば不思議にむしあつく、

甘い藥液^{くすり}の香^かも濕^{しめ}る、

晝のつかれのしをらしや。

白い日なかのヂキタリス。

青いとんぼ

青いとんぼの眼を見れば

緑の、銀の、エメロウド、

青いとんぼの薄き翅はね

とうしんさう

燈心草の穂に光る。

青いとんぼの飛びゆくは

魔法つかひの手練てだれかな。

青いとんぼを捕ふれば

女役者の肌ざはり。

青いとんぼの奇麗さは

手にさは觸るすら恐ろしく、

青いとんぼの落つきは
眼にねたきまで憎々し。

青いとんぼをきりきりと
夏の雪駄で蹈みつぶす。

猫

夏の日なかに青き猫

かろく擁いだげば手はかゆく、

毛みじろの動みじろげはわがこころ

感かぜ冒のこここに身ほても熱る。

魔法つかひか、金きんの眼の
ふかく息する恐ろしさ、

投^{おと}げて落せばふうわりと、
汗の緑のただ光る。

かかる日なかにあるもの
見えぬけはひぞひそむなれ。
皮^{ひふ}膚のすべてを耳にして
大^か麥の香になに狙^{ねら}ふ。

夏の日なかの青き猫
頬にすりつけて、美しくき、
ふかく、ゆかしく、おそろしき――
むしろ死ぬまで抱^だきしむる。

おたまじやくし

おたまじやくしがちろちろと、
粘^{ねば}りついたり、もつれたり、
青い針めく藻のなかに
黒く、かなしく、生^{いき}いきと。

死んだ蛙^{なま}が生じろく
仰^{あふむ}向きて浮く水の上、
銀の光が一面^{いちめん}に
鐘の「刹^{せつ}那^な」の音^ねのごとく。

おたまじやくしの泣き笑ひ
こゑも得立てね、ちろちろと、
けふも痛^{いた}そに尾^{はぢ}を弾^はく、
黒く、かなしく、生^{いき}いきと。

おたまじやくしか、わがこころ。

銀のやんま

ふたり
二人ある日はやうもなき

銀のやんまも飛び去らず。

君の歩みて去りしとき

銀のやんまもまた去りぬ。

銀のやんまのろくでなし。

にくしみ

青く黄^きの斑^ふのうつくしき

やはらかき翅^はの蝶^{チュウツケ}を、

ピンか、紅^{ルビ}玉か、ただひとつ、

肩に星ある蝶を^{チュウツケ}

強ひてその手に渡せども
取らぬ君ゆゑ目もうちぬ。
夏の日なかのにくしみに、
泣かぬ君ゆゑその唇に^{くち}
青く、黄^きの粉^この恐ろしき
にくらしき翅^はをすりつくる。

白粉花

おしろひ花の黒きたね
爪を入れるれば粉のちりぬ。
幼^{をさ}なごころのにくしみは
君の來たらぬつかのまか。
おしろひ花の黄^{きな}と赤、

爪を入れるれば粉のちりぬ。

水蟲の列

朽ちた小舟の舟べりに

赤う列なみゆく水蟲よ、

そつと觸さはればかつ消えて、

またも放せば光りゆく。

いさかひのあと

紅あかいシャツ着てたたずめる

TONKA JOHN、そかなしけれ。

白鳳仙花しろつまぐれのはなさける

夏の日なかにただひとり。

手にて觸さはればそのたねは
莢さやをはぢきて飛び去りぬ。
毛蟲ビシに針をつき刺せば
青い液しる出て地ににじむ。

源四郎爺は、目のうすき
魚さかなかついでゆき過ぎぬ、
彼の禿かれげたる頭あたまより
われを笑へるものぞあれ。

憎にくき街まちかな、風の來て
合歡カウカの木をば吹くときは、
さあれ、かなしく身をそそる。
君にそむきしわがこころ。

爪紅

いさかひしたるその日より
爪つまぐれ紅の花さきにけり、

TINKA ONGO の指さきに

さびしと夏のにじむべく。

Tinka Ongō. 小さき令嬢。 柳河語。

夕日

赤い夕日、——

まるで葡萄酒のやうに。

漁師原に鶏頭が咲き、

街まちには虎列コレラ拉はやが流行つてゐる。

濁つた水に

土臭つちくさい鮒ふがふよつき、

酒倉みこへは巫女みこが來た、

腐敗くされどめ止どめのまじなひに。

こんな日がつづいて

從姉いとこは氣が狂つた、

片おもひの鶏頭、

あれ、歌ふ聲がきこえる。

恐ろしい午後、

なにかしら畑で泣いてると、

毛しそのついた紫蘇しそまでが

いらいらと眼いたに痛い。……………

赤い夕日、――

まるで葡萄酒のやうに。

何かの蟲がちろりと

鳴いたと思つたら死んでゐた。

紙きり蟲

紙きり蟲よ、きりきりと、

薄い薄葉^{うすえふ}をひとすぢに。

何時^{いつ}も冷たい指さきの

青い疵^{きず}さへ、その身さへ、

遊びつかれて見て泣かす、

君が狂氣^{きやうき}のしをらしや。

紙きり蟲よ、きりきりと

薄い薄葉^{うすえふ}をひとすぢに。

わが部屋

わが部屋に、わが部屋に

長崎の繪はかかりたり、――

路のべに尿^{いばり}する和蘭人^{おらんだじん}の――

金紙^{きんがみ}の鎧もあり、

赤き赤きアラビヤナイトもあり。

わが部屋に、わが部屋に

はづかしき幼兒^{をさなご}の

ゆめもあり、

かなしみもあり、

かつはかの小さき君の

なつかしき足音もあり。

わが部屋に、わが部屋に

奇異なる事ありき、

かなしきはそれのみか、

その日より戸はあかず、………

せんなしや、わが夢も、足音も、赤き版古も。

わが部屋に、わが部屋に

弊私的里の従姉きて

蒼白く泣けるあり。

誰なれば誰なればかの頭

醫者のごと寄り添ひて眠るやらむ。

わが部屋に、わが部屋に、

ほこらしく、さは^{ふたり}二人。

監獄のあと

廢^{すた}れたる監獄^{かんごく}に

鶏頭さけり、

夕日の照ればかなしげに
頸^{くび}を顫^{ふる}はす。

そのなかにきのふまで

白痴^{はくち}の乞食^{こじき}、

髪くさき女の甘き恐怖^{おそれ}もて
虱^{しらみ}とりつる。

ある日、血は鶏頭の

半開^{はんかい}の花にちり、
毛の黄なる病犬^{やまいぬ}の
ひとり光ぬ。

そののちはなにも見ず、
かの犬も殺されて
しどけなき長雨の
ふりつづく月はきぬ。

廢れたる監獄に
鶏頭咲けり、
夕日のてればかなしげに
頸^{くび}を顫はす。

午後

わが友よ、

けふもまた骨牌トランプの遊びにや耽らまし、

かの轉まろがされし酒桶さかのなかに入りて、

風味ふうみよき日光を浴あび、

絶えず白きザボンの花のちるをながめ、

肌きさはりよきかの酒の木香きがのなかに日くるるまで、

わが友よ、

けふもまた舶來のリイダアをわれらひらき、

珍ふしらしき節つけて『鷺鳥はガツグガツグ』とぞ、
そぞろにも讀み入りてまし。

アラビアンナイト物語

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

菱ひしの咲く夏のはじめの水路すゐろから

銀が、みどりが……顫へ來て、
本の活字くわつじが目に沁みる。

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

赤い表紙の手ざはりが

狂氣きやうきするほどなつかしく、

けふも寢てゆく舟の上。

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

葡萄色した酒ぶくろ、

干しにゆく日の午後ひるすぎに

しんみりと鳴る、櫓の音が……

鳴いそな鳴いそ春の鳥。

ネルのにほひか、酒の香か、

舟はゆくゆく、TONKA JOHN

魔法つかひが金の夢。

註 酒を搾り了れるあとの濕りたる酒の袋を干しにとて、日ごとにわが家の小舟は街の水路を上りて柳河の公園の芝生へとゆく。わが幼時の空想はまたこの小舟の上にて思ふさまその可憐なる翅をばかいひろげたり。

敵

いづこにか敵のゐて、

敵のゐてかくるごとし。

酒倉のかげをゆく日も、

^{まち}街の問屋に

銀紙^{ぎんがみ}買ひに行くときも、

うつし繪を手の甲に押し、

手の甲に押し、

夕日の水路^{すゐろ}見るときも、

ただひとりさまよふ街の

いづこにか敵のゐて

つけねらふ、つけねらふ、静^{しず}こころなく。

たそがれどき

たそがれどきはけうとやな、

傀儡^{くぐつまはし}師の手に踊る

華魁^{おいらん}の首生^{なま}じろく、

かつくかつくと目が動く……………

たそがれどきはけうとやな、

瀉^{おと}に墮した黒猫の

足音もなく歸るころ、

ひとだま
人靈もゆく、家の上を。

たそがれどきはけうとやな、

馬に載せたる鮪しびの腹

薄く光つて滅きえ去れば、

店の時計がチンと鳴る。

たそがれどきはけうとやな、

日さへ暮るれば、そつと來て

いきぎもとり
生膽取の青き眼が

泣く兒欲ほしやと戸を覗のぞく……………

たそがれどきはけうとしやな。

赤き椿

わが眼^めに赤き藪椿。

外^{そと}の空氣にあかあかと、

音なく光り、はた、落つる。

いま死にのぞむわが乳母の

かなしき眼^めつき………藪椿。

醜^{みにく}き面^{かほ}をゆがめつつ

家畜^{かちく}のごとく、はた泣くは、

わが手^てを執^とるは、吸ひつくは、

憎^{にく}く、汚^{きた}なく恐ろしき

最^{さい}愛^{あい}の手か、たましひか。

かの眼^めに赤き藪椿。

小さき頭^{あたま}悩^{なや}みにあかあかと、

音なく光り、はた、落つる。

二人

夏の日の午後^{ひるすぎ}………

瓦には紫の

薊ひとりかゞやき、

そことなしに雲が浮ぶ。

酒倉の壁は

二階の女部屋にてりかへし、
^{いた}痛いやうに針が動く、

印度更紗のざくろの實。

暑い日だった。

黙^{だま}つて縫ふ女の髪が、
その汗が、溜^{ため}息^{いき}が、
奇^ふ異^しな切^きなさ^さが……………

悩ましいひるすぎ、

人形の首はころがり、

黒^{チユウツ}い蝶^{ぢぎ}の断^つれた翅^{ばさ}、

その粉^{こな}の光る美しくさ、怪^こしさ。

たつた二人、……………

何か知らぬところに

九^{この}歳^つの兒が顫^{ふる}へて

そつと閉^しめた部屋の戸。

たはむれ

菖蒲の花の紫は

わが見物のころかな。

かつは家鴨あひるの尻がろに

水へ滑すべるは戯おどけたる

道化芝居の女かな。

軍鶏しやものにくきは定九郎か、

與一兵衛には何よけむ。

カステラひよこいろの雛ひよこらは

かの由良さんのとりまきか、

びよびよびよとよく歌ふ。

禿はげた金茶きんちやの南瓜ボウフラは

九太夫どのか、伴内か、

青い蜻蛉とんぼの息絶えし

おかると名づけ水くれむ。

銀の力彌の肩衣かたぎぬは

いちはずぐさか、——雨がへる

びよいと飛び出た宙ちうがへり、

青い捕手とりての幕切まくぎれは

ええなんとせう、夜の雨に。

苧麥のにほひ

あかい日の照る苧麥に

そつと眠れば人のこゑ、

鳥の鳴くよに、歎しやく歎るよに、

銀の蝨斯ジイッタンはじの弾くよに。

ひとのすがたは見えねども、
なにが悲しき、そはそはと、

黄ろい羽蟲がやはらかに
解^とけて縛^{もつ}れて歎^{しやく}歎^くるこゑ。

あかい日のてる苧麥に、

男かへせし美代はまた

驚^{あひる}追^ひひつつその卵

そつと盗^とるなり前掛^{まへかけ}に。

青い鳥

せんだんの葉越しに、

青い鳥が鳴いた。

『たつた、ひとつ知つてるよ。』つて、
さもさもうれしさうに、かなしさうに。

日の光に顫へながら、
けふけふ
今日も今日も鳴いてゐる。

『棄^{すて}兒の棄兒の TONKA JOHN
眞^{ほん}實^とのお母^{つか}さんが、外^{ほか}にある。』

註 わが幼き時の恐ろしき疑問のひとつは、わが母は眞にわが母なりやといふにありき。
ある人は汝は池のなかより生れたりと云ひ、ある人は紅き果の熟る木の枝に籠ととも
に下げられて泣きてゐたりしなど眞しやかに語りきかしぬ。小さき頭悩のこれが
爲めに少なからず脅かされしこと今に忘れず。

TONKA JOHN の悲哀

春のめざめ

JOHN, JOHN, TONKA JOHN,

* 油屋の JOHN, 酒屋の JOHN, 古問屋ふとんぐちやの JOHN,我儘はでで派美好きな * YOKARAKA JOHN

≪SORI-BATTEN!≫

南風はえが吹けば菜の花畑のあかるい空に、眞赤まつかな眞赤しゆな朱のやうな * MEN が大きな朱の風たこが自家うちから揚る。

≪SORI-BATTEN!≫

麴かうじむろ室の長い冬のむしあつさ、

そのなかに黒い小猫を抱いて忍び込み、

皆^{みんな}して骨牌^{トランプ}をひく、黄色い女王^{クイーン}の感じ。

≪SORI-BATTEN!≫

女の子とも、飛んだり跳ね^はたり、遊びまはり、

今^{こんど}度は熱病のやうに讀み耽る、

ああ、ああ、舶來のリイダアの新らしい版畫^{はんぐわ}の手觸^{さは}り。

≪SORI-BATTEN!≫

夏の日が酒倉の冷^{つめ}たい白壁に照りつけ、

ちゆうまえんだに天鷲^{てんしゅう}絨葵^{じふひ}の咲く

六月が來た、くちなはが堀^{ほり}をはしる。

≪SORI-BATTEN!≫

秋のお祭がすみ、立つてゆく博多^{にわか}二〇加のあとから
戰^{いくさ}のやうな酒づくりがはじまる、

金色きんいろの口あたりのよい日本酒にっぽんしゅ。

“SORI-BATTEN!”

TONKA JOHN の不思議な本能の世界が

魔法と、長崎と、和蘭陀の風景に

思ふさま張りつめる……………食慾が躍る。

“SORI-BATTEN!”

父上、母上、さうして小さい JOHN と *GONSYAN.

痛いほど香ひだす皮膚から、靈魂おそれの恐怖から、

眞赤まつかに光つて暮れる TONKA JOHN の十三歳。

“SORI-BATTEN!” “SORI-BATTEN!”

1. 油屋、酒屋、古問屋。油屋はわが家の屋號にて、そのむかし油を鬻ぎしというにもあらず。酒造のかたはら、舊くより魚類及※物の問屋を業としたるが故に古問屋と呼びならはしぬ。

2. Yokaraka John. 善良なる兒、柳河語。

3. 朱の Men. 朱色の人面の風、その大きなは直径十尺を超ゆ。その他は概ね和風
風の菱形のものをゆ。

4. Gonshan. 良家の令嬢。柳河語。

秘密

桑の果の赤きものかげより、午後ひるすぎの水面みのもは光り
奇異ふしぎなる新らしき生活いとなみに蛙らはとんぼがへりす。

ねばれる蛇の卵見ゆ、かつは臭におのくさければ

*ガメノシユブタケしか鰓しかめつつ毛根を水に顫ふるはす。……………

かなたこなたに咲く花は水ヒアシンス、
その紫に蜻蛉とんぼゐてなにか凝視みつむれ、一心に。

そのとき、われは桑の果の赤きかげより、
祭りびの太鼓の囃子厭はしく、わが外の世をば隙見しぬ。

かの銀箔の歎きこそ魔法つかひの吐息なれ、
皮膚の痛みにえも鳴かぬ蛙の、あはれ、宙がへり。

かかる日にこそわが父母を、かかる日にこそ、
眞實ならずと來て告げむ *OMIKA の婆に心おびゆる。

1. Omika の婆。Omika と呼ぶ狂氣の老婆なり。つねにわが酒倉に來てこの酒倉はわがもので、この酒もわがもので、Tonka John 汝もわがもので。汝の父母と懷かしむ彼やつらは全く赤の他人にてわれこそは汝が母ぞよ。われを見て脅かしぬ。

2. ガメノシユブタ。水草の一種、方言。

太陽

太陽は祭日の喇叭らっばのごとく、

放たれし手品つかひの鳩のごとく、

或は閃めく薬湯やくたうのフラフのごとく、

なつかしきアンチピリンの粉こなのごとし。

太陽は紅く、また、みどりに、

幼年の手に回すまは萬華鏡ひやくめがねのなかに光り、

※物の花にむせび、

薄きレンズを透かしてわが怪しき幽ほののそこに、

微かなる幻燈のゆめのごとく、また街まちの射影をうつす。

太陽はまた合歡カウカの木をねむらせ、

やさしきたんぽを吹きおくり、

銀のハーモニカに、秋の收穫とりのいれのほひに、

或は青き蟾蜍ワケドの肌に觸れがたき痛みをちらす。

太陽は枯草のほめきに、たうもろこし 玉蜀黍の風味に、
優しき姉のさましていたは 勞れども、

太陽は太陽は

新らしき少年の恐怖おそれにぞ——身と靈との變りゆく秘密にぞ、
あまりにも眩ゆき判はんぐわん 官のまなざしをもて
ああ、ああ、太陽はかにかくに凝視みつめつつ脅かす。

夜

夜よるは黒……………銀箔ぎんぱくの裏面うらの黒。
滑なめらかな瀉海がたうみの黒、
さうして芝居さげまくの下幕の黒、
幽靈の髪かみの黒。

夜は黒……ぬるぬると蛇くちなはの目が光り、

おはぐろの臭いにおひやらしく、

千金丹かほんの鞆たもとがうろつき、

黒猫がふわりとあるく……夜は黒。

夜は黒……おそろしい、忍びやかな盗人ぬすびとの黒。

定九郎の蛇目傘じやのめがさ、

誰だか頸くびすぢに觸さわるやうな、

力のない死螢はねの翅はねのやうな。

夜は黒……時計の數字の奇異ふしぎな黒。

血潮なまのしたたる

生じろい鋏なまを持つて

生いき膽取きもとりのさしのぞく夜。

夜は黒……………つぶ眠つても眠つても、
青い赤い無数の靈むすうたましひの落ちかかる夜。
耳鳴みみなりの底知れぬ夜。よる

暗い夜。

ひとりぼっちの夜。

夜……………夜……………夜……………

感覺

わが身は感覺のシンフォニー、

眼は喇叭、

耳は鐘、

唇は笛、

鼻は胡弓。

その病める頬を投げいだせ、
たんぽぽの光りゆく草生に、
肌^{はだへ}はゆるき三味線の
三の絲の手ざはり。

見よ、少年の秘密は

玉蟲のごとく、

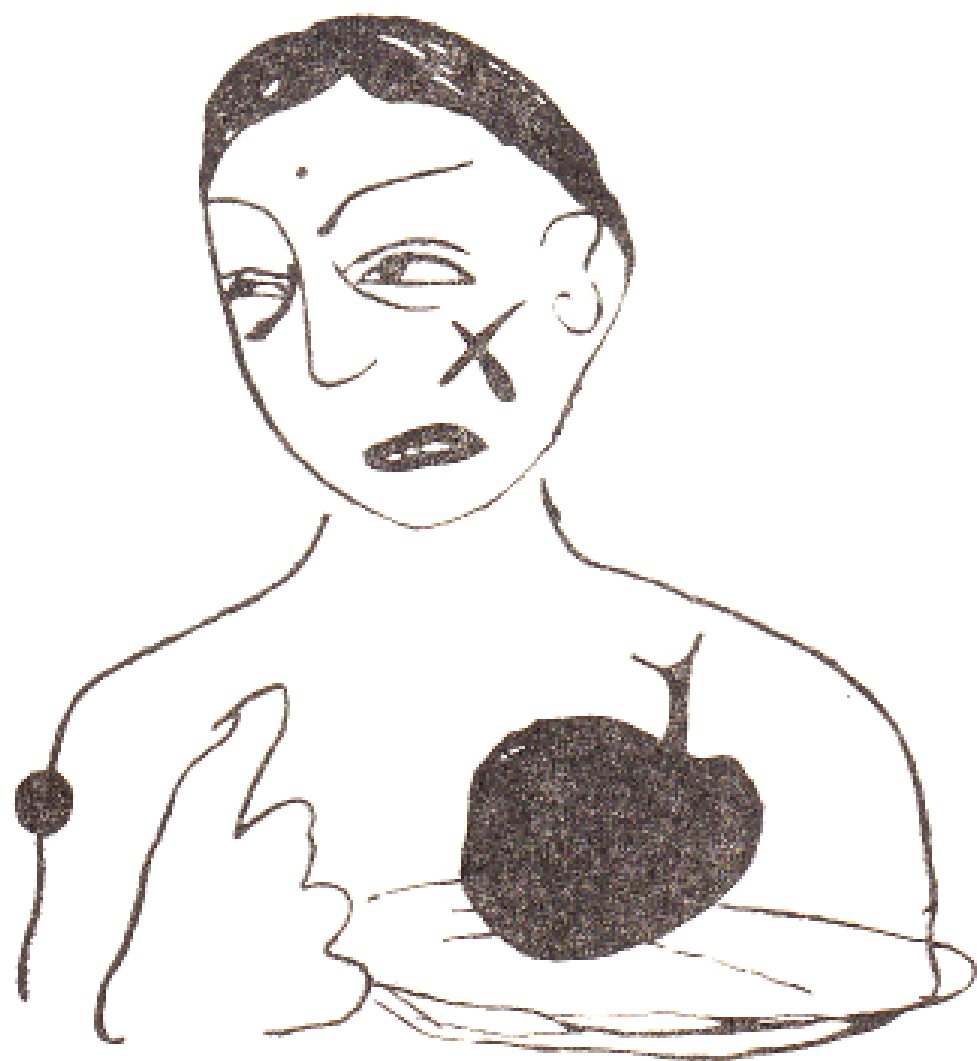
赤と青との甲斐絹^{かひき}のごとく、

滑りかがやく官能のうらおもて。

その感覚を投げいだせ――

黒猫は眼を据ゑてたぶらかし、
酸漿^{ほづき}は眞摯^{まじめ}に孕み^{はら}、

緑いろの太陽は酒倉に照る。



Ikigimo tori.

全神経を投げいだせ、

紫の金の蜥蜴^{とかげ}のかなしみは

素肌をつけてはしりゆく、

いら草の葉に、^{にら}蕤の葉に。

げに、幻想のしたたりの

恐れと、をのきと、啜泣き、

匿^{かく}しきれざる性のはづみを弾ねかへせ、

美しくしきわが夢の、笛の喇叭の春の曲。

晝のゆめ

酒倉の強き臭^{におひ}を嗅ぐときは

夏のさみしく、

油屋の黄なる搾木しめぎをきくときは
秋のかなしく、

少年の感じ易さは、怪しさは、
あはれ、ひねもす、

金文字の古き蘭書に耳をあて

黒猫の晝の瞳に見ることく、

冬もゆめみぬ、ゆゑわかぬ春のシムフォニー。

朱戀のかげ

弟よ、

かかる日は喧嘩いさかひもしき。

紫蘇しその葉のむらさきを、
蕚ならをまた踏みにじりつつ、
われ打ちぬ、汝なれ打ちぬ、
血のいづるまで、

やはら
柔かなる幼年の體からだの

こころよく、こそばゆく手に痛いたきまで。

豚小屋のうへにザボンの實黄にかがやきて、

腐れたるものの香に日のとろむとき、

われはまた汝なが首を擁いだきしめ、擁きしめ、

かぎりなき夕ぐれの味覺に耽る。

ふくれたるその頬をばつねるとき、

わが指はふたつなき諧シムフォニ樂を生み、

いと赤き血を見れば、泣聲のあふれ狂へば、

わがこころはなつかしくやるせなく戯たはれかなしむ。

思ひいづるそのかみの TYRANT.

狂ほしきその愉ゆた樂……………

今もまた勾高き外光の中

あかあかと二人して落すザボンよ。

その庭のそのゆめの、かなしみのゆかしければぞ、

弟よ、

かかる日は喧嘩いさかひもしき。

幻燈のほひ

わが友よ、わが過ぎし少年の友よ、

汝なは知るや、なつかしき幻燈の夜を、

ほの青きほの青き雪の夜景を、——

水みづくるま車 しづかにすべり、霏々として綿雪のふる。

ふりつもる異國の雪は陰影かげの雪、おもひでの雪。

いつしかと眼に滅きえぬべきかなしみの映畫えいぐわなれども、

その夜には

小さな女の友の足のうら指につめたく、

チクタクと薄き時計もふところに針を動かす……………

いとけなきわれらがゆめに絶間なくふりつもる雪。

ふりつもる「時」の沈黙にうづもれて滅ゆる昨日よ。

淡つけきわが初戀のかなしみにふる雪は薄荷の如く、

水車しづかにすべり、ピエローは泣きてたどりぬ。

ほの青きほの青き幻燈の雪の夜景に

われはまた春をぞ思ふ、

マンドリン音をひそめしそのあとの深き恐怖に、

ふりつもる雪、ふりつもる雪、……………ゆゑわかぬ性の芽生は

青猫の耳の顫へをわが膝に美しくみつ。

雨のふる日

わたしは思ひ出す。

緑青 ろくしやう いろの古ぼけた硝子戸棚を、

そのなかの賣藥の版木と、硝石の臭と、
にほひ :

しとしとと雨のふる夕かた、
濡れて歸る紺と赤との燕を、
つばくらめ

しとしとと雨のふる夕かた、

蛇目傘 じやのめ を斜に疊んで、
はす

正宗を買ひに來た年増の眼つき、
としま :

びいどろの罎を取つて
だま 無言つて量る.....
はか 禿頭の番頭。

しとしとと雨のふる夕かた、

巫子^{みこ}が來て振り鳴らす鈴^{すず}……………
なまこかべ
生鼠壁^{なまねこかべ}の黴^{かび}に觸^{さは}る外面^{おもて}の
ひとだま
人靈^{ひとたま}の燐光。

わたしは思ひ出す。

しとしとと雨のふる夕かた、

叉^{あいくち}首を抜いて

死なうとした母上の顔、

ついついと鳴いてゐた紺と赤との燕^{つばくらめ}を。

BALL

柚子^{ゆず}の果^みが黄色く、

日^ひがあかるく、

さうして熱^{あつ}い BALL.

ふ
觸れ易いこころの痛さ、
何がなしに
握りしむる BALL.

投げるとき、
やはらかな掌に、
なつかしい汗が光り……………

受けるとき、
しみじみと抱く音、
せつぶん
接吻……………

日が赤く、
柚子の果が黄色く、

何處^{どこ}かで糸操りの車。

なつかしい少年のところに

圓い、軟^{やはら}かな BALL の

やるせなさ……………

柚子^{ゆず}の果^みが黄色く、

日^ひがあかるく、

さうして投げかはす BALL.

尿する和蘭陀人

尿^{いばり}する和蘭陀人……………

あかい夕日が照り、路傍の菜園には、
キヤベツの新らしい微風、

切通のかげから白い港のホテルが見える。

十月の夕景か、ぼうつと汽笛のきこゆる。

なつかしい長崎か、ホンコン香港の入江か、ポルトガル葡萄牙？佛蘭西？

ザボンの果の黄色いかがやき、

そのさきを異人がゆく、女の赤いボンネット軽帽……………

いばり
尿する和蘭陀人……………

そなたは何を見てゐる、ゆみなり彎曲の路から、

斷層面の赤いてりかへしの下から、

前かがみに腰をかがめた、あちら向きの男よ。

わたしは何時ものどか長閑な汝の頭上から、

瀟洒なぐわいりんせん外輪船の出てゆく油繪の夕日に魅みせられる。

病氣のとき、ねむるとき、さうして一人で泣いてゐる時、

ほんのしばらく立ちどまり、尿する和蘭陀人のこころよ。

水中のをどり

色あかきゐもりの腹のひとをどり、

水の痛^{いた}さにひとをどり。

腹の赤さは血のごとく、

水の痛^{いた}さは石炭酸を撒^ふることし。

時は水無月、日は眞晝、

ゐもりの小さきみなし兒は

尻尾^{しつぽ}もふらず、掌^ても開^あかず、

たつた、ふたつの眼を開^あけて

ついとかへりぬひとをどり……………

風はつめたく、山ふかく、

青い松葉が針のごと光りて落つるたまり水。

色あかきるもりの腹のひとをどり、

水の痛さにひとをどり。

怪しき思

われは探しぬ、色黒き天鷲絨びろうどの蝶、

日ごと夜ごとに針ピンを執り、テレピンを執り、

かくて殺しぬ、突き刺しぬ、ちぎり、なすりぬ。

鬼百合の赤き花粉を嗅ぐときは

ひとり呪ひぬ、引き裂きぬ、噛みぬ、にじりぬ。

金文字の古き洋書の鞣なめしがは皮

ああ、それすらも黒猫に爪をかかしつ。

われは愛しぬ、くるしみぬ……顫へ、おそれぬ。
怪しさは蛹のほのほの泣くごとく、
青き蝮まむしのふたつなき觸覺のごと、
われとわが身をひきつつみ、かつ、かきむしる。
美しくき少年のえもわかね性の憂鬱。

金縞の蜘蛛

ゆく春のあるかなきかの絲に載り、
身を滑すべらする金縞きんしまの蜘蛛くも。
雨ふれば濡れそぼち、
日のてれば光りがやく金縞の蜘蛛。
その青き金縞の蜘蛛。

怪しく美しくしき眼は

晝の年増としまの秘密をば見て見ぬふりにうち顫へ、

うら耻かしき少年の夢を見透かし、

明日あす死ぬるわが妹の命いのちをかひたと凝視みつむる。

ゆく春のあるかなきかの絲に載り、

身を滑すべらする金縞の蜘蛛。

人來くれば肢あしを縮ちぢめ、

蟲來くれば捕とりて血を吸ふ金縞の蜘蛛。

ただ一日ひとひ青く光れる金縞の蜘蛛。

兄弟

われらが素肌すはだのさみしさよ、

細葱ほそねぎの青き畑はたけに、

きりぎりすの鳴く眞晝に。

金きんいろの陽ひは

匍もひありく弟の胸掛にてりかへし、
そが兄の銀ぎんの小笛にてりかへし、
護謨ゴム人形の鼻とがの尖りに彈はねかへる。

二人ふたりが眼うづに映るもの、

いまだ酸ゆき梅の果、

土龍もぐらのみち、

晝の幽靈。

素肌にあそぶさびしさよ、

冷つめたき足の爪さきに畑はたけの土つちは新らしく、

金きんの光は絶間なく鐵てつ琴きんのごと彈ねかへる。

かくて哀しき同胞は
同じ血脈のかなしみのつき纏ふにか、呪ふにか、
離れんとしつ、戯れつ………

みどり兒は怖々と、あちら向きつつ蟲を弾ね、
兄は眞青の葱のさきしんと眺めて、唇あてて
何かえわかぬ晝の曲、
ひとり寥しく笛を吹く、銀の笛吹く、笛を吹く。

思

堀端に無花果みのり、
その實いとあかくふくるる。

軟風^{そよかぜ}の薄きころは
腫物^{はれもの}にさはるがごとく。

夏はまた唾^{おふし}の水馬^{すいま}、
水面^{みづのも}にただ弾^{はち}くのみ。

誰か來て、するどきナイフ
ぐさと實^つを突き刺せよかし。
……………

無花果^{けふ}は、ああ、わがゆめは、
今日^{けふ}もなほ赤くふくるる。

水銀の玉

初冬の朝間^{あさま}、鏡をそつと反^{かへ}して、

緑ふくその上に水銀の玉を載すれば
ちらちらとその玉のちろろめく、

指さきに觸るれば

ちらちらとちぎれて

せんなしや、ちろろめく、

捉へがたきその玉よ、小^{ちい}さき水銀の玉。

わかき日の、わかき日の、ちろろめく水銀の玉。

接吻の後

怖ろしきその女、

なつかしきその夜。

翌^{あけ}の日は西よりのぼり、
恐怖^{おそれ}と光にロンドン咲く。

血のごとく赤きロンドン。

われはただ路^{みちばた}傍に俯し、
青ざめてじつと凝視^{みつ}めつ。

血のごとく赤きロンドン。

ロンドンに

弾^はねかへる 甲^{かぶとむし}蟲、

——ある事を知るごとくに。

はねかへる甲蟲、

われはただロンドンに

言葉なく顫へて恐る。

——わが生の第一の接吻^{キス}。

たんぽぽ

わが友は自刃したり、彼の血に染みたる亡骸はその場所より靜かに釣臺に載せられて、彼の家へかへりぬ。付き添ふもの一兩名、痛ましき夕日のなかにわれらはただたんぽぽの穂の毛を踏みゆきぬ、友、年十九、名は中島鎮夫。

あかき血しほはたんぽぽの

ゆめの逕こみちにしたたるや、

君がかなしき釣つりだい臺は

ひとり入日にゆられゆく……………

あかき血しほはたんぽぽの

黄なる蕾つぼみを染めてゆく、

君がかなしき傷きずぐち口に

春のにほひも沁み入らむ……………

あかき血しほはたんぽぽの
晝のつかれに觸れてゆく、
ふはふはと飛ぶたんぽぽの
圓い穂の毛に、そよかぜに……

あかき血しほはたんぽぽに、
けふの入り日もたんぽぽに、
絶えて聲なき釣臺の
かげも、靈もたんぽぽに。

あかき血しほはたんぽぽの
野邊をこまかに顛へゆく。
半ばくづれし、なほ小さき、
おもひおもひのそのゆめに。

あかき血しほはたんぽぽの
かげのしめりにちりてゆく、
君がかなしき傷口にきずぐち
蟲の鳴く音ねも消え入らむ……………

あかき血しほはたんぽぽの
けふのなごりにしたたるや、
君がかなしき釣臺つりだいは
ひとり入日にゆられゆく……………

柳河風俗詩

柳河

もうし、もうし、柳河^{やながは}じや、

柳河じや。

銅^{かね}の鳥居を見やしやんせ。

欄干^{らんかんぼし}橋をみやしやんせ。

（馭^ね者は喇叭の音をやめて、

赤い夕日に手をかざす。）

薊の生えた

その家は、……………

その家は、

舊^{ふる}いむかしの遊女^{ノスカイヤ}屋。

人も住はぬ遊女^{ノスカイヤ}屋。

裏の* BANKO にゐる人は、……………

あれは隣のままむすめ繼娘。

ままむすめ繼娘。

水に映つたそのかげは、……………

そのかげは

母の形見のかたみ こてまり小手鞠を、

小手鞠を、

赤い毛糸でくくるのじや、

涙片手にくくるのじや。

もうし、もうし、旅のひと、

旅のひと。

あれ、あの三味をきかしやんせ。

塙にほの浮くのを見やしやんせ。

（馭者は喇叭の音をたてて、

赤い夕日の街まちに入る。）

ゆうやけ　こやけ
夕焼、小焼、

あした
明日天氣になあれ。

* 緑臺、葡萄牙語の轉化か。

櫨の實

冬の日が灰いろの市街を染めた、――

めづらしい黄きいろさで、あかるく。

濁川に、向ふ河岸かしの櫨はじの實に、

そのかげの朱印を押した材木の置場に。

枯れ枯れになつた葦あしの葉のささやき、……………

潮の引く方へおとなしく家鴨あひるがすべり、
鰻うけを生けた魚籠うけのほひも澱とろむ。

古風な中二階の危ふさ、

欄干てすりのそばに赤い果みの萬年青おもとを置いて、

柳河ものさしのしをらしい縫針ぬいはりの娘が

物指ものさしを頬にあてて考へてる。

何處どこかで三味線の懶い調子、——

疲れてゆく靜かな思ひ出の街まち、

その裏うらの寂しい生活くらしをさしのぞくやうに

「出いでの橋」の朽ちかかつた橋桁はしげたのうへから

* YORANBANSHO の花嫁が耻かしさうに眺めてゆく。

久し振りに雪のふりさうな空そらあひ合から

氣まぐれな夕日がまたあかるくてりかへし、

櫨はじの實の卵いろに光る梢、

をりをり黒い鴉が留まつては消えてゆく。

* 嫁入のあくる日盛装したる花嫁綿帽をかぶりて先に立ち、澁き紋服の姑つきそひて、
町内及近親の家庭を披露してあるく、風俗花やかなれども匂いと古く雅びやかなり。

立秋

柳河のたつたひとつの公園に

秋が來た。

古い懷月樓くわいげつろうの三階へ

きりきりと繰り上ぐる氷水の硝子杯コップ、

薄茶うすちやに、雪に、しらたま、

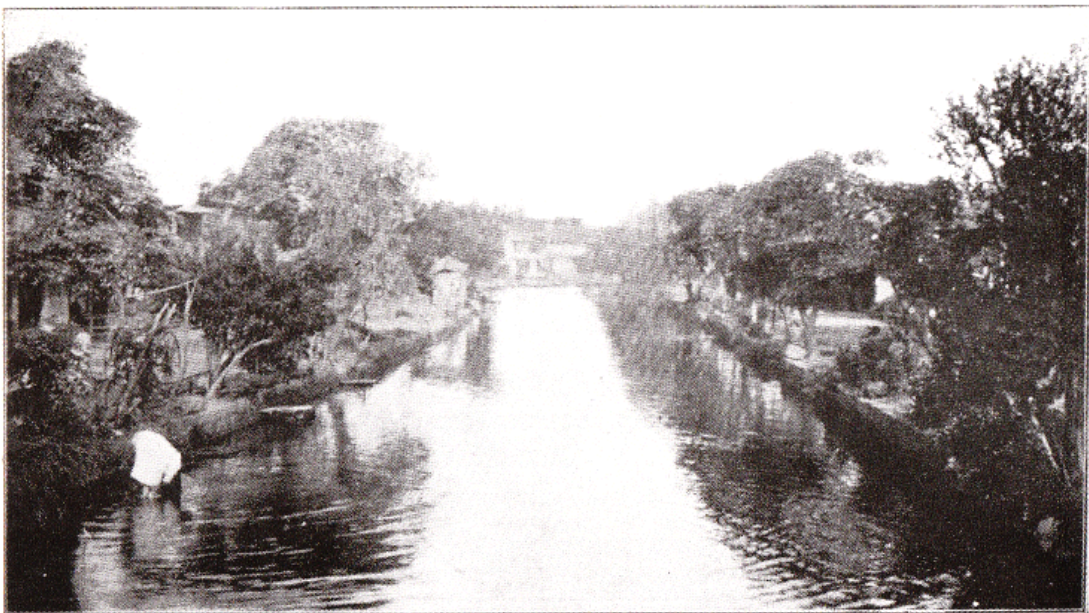
紅い雪洞あかほんぼりも消えさうに。

柳河のたつたひとつの遊女屋に
薊あざみが生え、

住む人もないがらんだうの三階から
きりきりと繰り下ぐる氷水の硝子杯コップ、
お代りに、ラムネに、サイホン、
こほろぎも欄干らんかんに。

柳河のたつたひとりの *NOSKAI は
しょんぼりと、
月の出の橋の擬寶珠ぎぼしゆに手を凭もたせ、
きりきりと音おとのかなしい薄あかり、
けふもなほ水のながれに身を映うつす。

「氷、氷、氷……………」



* 遊女、方言。

水路

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

しとやかな柳河の水路を、
すゐろ

定紋じやうもんつけた古い提灯が、ぼんやりと、

その舟の芝居もどりの家族かぞくを眠らす。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

あるかない月の夜に鳴く蟲のこゑ、

向ひあつた白壁の薄あかりに、

何かしら燐のやうなおそれがむせぶ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

草のにほひする低い土橋^{どばし}を、
いくつか棹をかがめて通りすぎ、
ひそひそと話してる町の方へ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……………

とある家のひたひたと光る汲水場^{クミツ}に

ほんのり立つた女の素肌

何を見てゐるのか、ふけた夜のこころに。

酒の黴

酒屋男は罰被^かぶらんが不思議、ヨイヨイ、
足で米といで手で流す、ホンニサイバ手
で流す。ヨイヨオイ。

金^{きん}の酒をつくるは
かなしき父のおもひで、
するどき歌をつくるは
その兒の赤き哀^{あいくわん}歡。

金^{きん}の酒つくるも、
するどき歌をつくるも、
よしや、また、わかき娘の
父^{てて}知らぬ子供生むとも……………

2

からしの花の實になる
春のすゑのさみしや。

酒をしぼる男の
肌さへもひとしほ。

3

酒袋^{さかぶくろ}を干すとして
ぺんぺん草をちらした。
散らしてもよかろ、
その實^みとなるもせんなし。

4

酛^{もと}すり唄^{うた}のころろは
わかき男の手にあり。
櫛^{かみ}をそろへてやんさの、

そなた戀しと鳴らせる。

5

麥の穂づらにさす日か、

さかやをとこ

酒屋男にさす日か、

輕ろく投げやるころの
けふをかぎりのあひびき。

6

人の生るもとすら

知らぬ女子のをなじころに、

誰たが馴れ初めし、酒屋の
にほひか、麥のむせびか。

7

からしの花も實となり、
 麥もそろそろ刈らるる。
 かくしてはやも五月は
 酒量^{はか}る手にあふるる。

8

櫛^{はじ}の實採^{みと}りの來る日に
 百舌^{もず}啼き、人もなげきぬ、
 酒をつくるは朝あけ、
 君へかよふは日のくれ。

9

ところも日をも知らねど、
ゆるししひとのいとしさ、
その名もかほも知らねど、
ただ知る酒のうつり香。

10

足をそろへて磨ぐ^と米、
水にそろへて流す手、
わかいさびしいこころの
歌をそろゆる朝あけ。

11

ひねりもちのにほひは
わが知る人も知らじな。
頑^{かた}くなのひとゆゑに
何時^{いつ}までひねるこころぞ。

12

微^{ほの}かに消えゆくゆめあり、
酒のにほひか、わが日か、
倉の二階にのぼりて
暮春をひとりかなしむ。

13

さかづきあまたならべて

いづれをそれと嘆かむ、

唼ききざけ酒するこころの、

せんなやわれも酔ひぬる。

14

その酒の、その色のにほひの

口あたりのつよさよ。

おのがつくるかなしみに

囚とられて泣くや、わかうど。

15

酒を醸かもすはわかうど、

心亂すもわかうど、
誰とも知れぬ、女の
その兒の父もわかうど。

16

ほのかに忘れがたきは
酒つくる日のをりふし、
ほのかに鳴いて消えさる
青い小鳥のころね。

17

酒屋の倉のひさしに
薊のくさの生ひたり、

その花さけば雨ふり、
その花ちれば日のてる。

18

計量機カンカンに身を載せて
量はかるは夏のうれひか、
薊の花を手にもつ
裸男の酒の香。

19

かなしきものは刺あり、
傷きずつき易きころの
しづかに泣けばよしなや、

酒にも^か酺^びのほひぬ。

20

目さまし時計の鳴る夜に
かなしくひとり起きつつ
倉を^ま巡回^はれば、つめたし、
月の光にさく花。

21

わが眠^ぬる倉のほとりに
青き光^ひ放つものあり、
螢か、酒か、いの寝ぬ、

合^{カウ}歡^{カノ}木^キのうれひか。

22

倉の隅にさす日は
微^ほかに光り消えゆく、
古りにし酒の香にすら、
人にはそれと知られず。

23

青葱とりてゆく子を
薄日の烟にながめて
しくしく痛^{いた}むところに
酒をしぼればふる雪。

24

銀の釜に酒を湧かし、
金の釜に酒を冷やす
わかき日なれや、ほのかに
雪ふる、それも歎かじ。

25

夜ふけてかへるふしどに
かをるは酒か、もやしか、
酒屋男のところに
そそぐは雪か、みぞれか。

酒の精

『酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ、そこには怖ろしき酒の精のひそめば。』

『兄上よ、それは小さき魔物まものならめ、かの赤き三角帽の西洋のお伽譚とぎばなしによく聞ける、おもしろき……………。』

『それは知らじ、然れどもかのわかき下婢アイヤンにすら母上は妄みだりにゆくを許したまはず。』

『それは訝いぶかしきかな、兄上、倉の内には力強き男らのあまたゐれば恐ろしき筈なし。』

『げにさなり、然れども弟よ、母上はかのわかき下婢アイヤンにすらされどなほゆるしたまはず。酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ。』

紺屋のおろく

にくいあん畜生は紺屋かうやのおろく、
猫を擁かかえて夕日の濱を
知らぬ顔して、しやなしやなど。

にくいあん畜生は筑前しほり、
華きや奢しやな指さき濃青こあをに染めて、
金きんの指輪もちらちらと。

にくいあん畜生が薄情はくじやうな眼つき、
黒の前掛まえかけ、毛襦子か、セルか、
博多帶しめ、からころと。

にくいあん畜生と、擁かかえた猫と、
赤い入日にふとつまされて

瀉がたに陥はまつて死ねばよい。ホンニ、ホンニ、……

沈丁花

からりはたはた織はたる機はたは
佛蘭西機ふらんすばたか、高機たかはたか、
ふつととだえたその窓に
守宮吸やもりひつき、日は赤し、
明あかり障子の沈丁花。

NOSKAI

堀の BANKO をかたよせて
なにをおもふぞ。花あやめ
かをるゆふべに、しんなりと

ひとり出て見る、花あやめ。

かきつばた

柳河の

古きながれのかきつばた、

晝は*ONGOの手にかをり、

夜は^{しを}萎れて

三味線の

細い吐息^{といき}に泣きあかす。

^{ケエツグリ}
(鳩のあたまに火が^つ点いた、

^す潜んだと思ふたらちよいと消えた。)

* 良家の娘、柳河語

* AIYANの歌

いぢらしや、

ちゆうまえんだのゆふぐれに

蜘蛛コブツカが疲れて身をかくす、

ほんに薊トゲの紫に

刺とげが光るぢやないかいな。

(* ANTEREGAN の畜生はふたごころ。わしやひとすぢに。)

1、下婢、兒守女、柳河語。

2、あの畜生？

曼珠沙華

GONSHAN. GONSHAN. 何處どこへゆく、

赤い、御墓おはかの曼珠沙華、

曼珠沙華ひがんばんな、

けふも手折りに來たわいな。

GONSHAN. GONSHAN. 何^{なん}本^{ほん}か、

地には七本、血のやうに、

血のやうに、

ちやうど、あの兒の年^{かず}の數。

GONSHAN. GONSHAN. 氣をつけな、

ひとつ摘^つんでも、日は眞晝、

日は眞晝、

ひとつあとからまたひらく。

GONSHAN. GONSHAN. 何^{なし}故^な泣^なくろ、

何時^{いつ}まで取つても曼珠沙華^{ひがんばん}、

曼珠沙華、

恐^{こは}や、赤しや、まだ七つ。

牡丹

ほんにの、薄^{はくじやう}情^{じやう}な牡丹がちりかかる。

風もない日に、のう、

紅^{あか}い牡丹が、のうもし、ちりかかる。

ひらきつくした二人^{ふたり}がななか、

雨もふらいで、のうもし、ちりかかる。

氣まぐれ

逢ひに來た*ちの

日の照り雨のふるなかを、

*Odan mo iya, Tinco Sai

しやりむり別れたそのあとで、

未練^{みれん}な牡丹がまたひらく。

Odan mo iya, Tinco Sai

1、ちのは雅言のとやなり。來たの、來たんですつて。柳河語。

2、Odan はわたしなり、Tinco Sa は感嘆詞なり、全體の意味はあら厭だよ、まあ。同上。

道ゆき

鰯^{ぼら}と黒鰯^{ちんのいを}と、

黒鰯^{ちんのいを}と、

鰯と、のうえ

肥前山をば、やんさのほい、けさ越えた、ばいとこずいずい。

後家^{ごけ}と、按摩^{あんま}さんと、

按摩さんと、

後家と、のうえ

蜜柑畑から、やんさのほい、昨夜逃げた、ばいとこずいずい。

目くばせ

門づけの*みふし語りがいうことに

高麗烏のあのこゑわいな。

晝の日なかに生れた赤子

埋めた和尚が一人あるぞえ。

古寺の高麗烏のいふことに、

みふし語りのあの絃わいな。

今日も今日とて、かんしやくもちの

振られ男がそこいらに。

* 鄙びた粗末なる一種の琵琶を抱きて卑近なる物語を歌ひながらゆく盲目の門づけな

り、地方特殊のものにてその歌ひものをみふしと云ふ。

あひびき

*きつねのてうちん見つけた、

蘇鐵のかげの黒土くろつちに、

黄いろなてうちん見つけた、

晝も晝なかおどおどと、

男かへしたそのあとで、

お池のふちの黒土に、

きつねのてうちん見つけた。

*毒茸の一種、方言、色赤く黄し。

水門の水は

水門すゐもんの水は

兒をとろとろと渦をまく。

酒屋男は

半切はんぎり鳴らそと權を取る。

さても、けふ日のわがこころ
りんきせうとてひとり寝る。

六騎

*御正忌参詣しやうきめえらんかん、

情人やねが髪結まふて待つとるばん。

御正忌参詣めえらんかん、

寺よの夜あけの細道ほそみちに。

鐘が鳴る、鐘が鳴る。

逢うて泣けとの鐘が鳴る。

* 親鸞上人の御正忌なり。

梅雨の晴れ間

まは せ、まは せ、水ぐるま、

けふの午ひるから忠信ただのぶが隈くまどり紅あかいしやつ面つらに

足どりかろく、手もかろく

狐きつね六ろ法ぽふ踏ふみゆかむ花道の下、水ぐるま……………

まは せ、まは せ、水ぐるま、

雨に濡れたる古むしろ、圓天井のその屋根に、

青い空透き、日の光、

七しつぽう寶のごときらきらと、化粧けしやうべや部屋にも笑ふなり。

まは
せ、せ、水ぐるま、

梅雨つゆの晴れ間まの一日いちにちを、せめて楽しく浮かれよと

り舞臺すべ滑るなり、

水を汲み出せ、そのしたの葱はたけの畑のたまり水。

まは
せ、せ、水ぐるま、

だんだら幕の黒と赤、すこしかかけてなつかしく

旅おやまの女形もさし覗く、

水を汲み出せ、平土間ひらどまの、田舎芝居にらばたけの蕪畑。

まは
せ、せ、水ぐるま、

はやも午ひるから忠信ただのぶが紅隈べにくまとつたしやつ面つらに

足どりかろく、手もかろく、

狐きつね六法ろっぽふ踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……………

葦の葉

芝居小屋の土間のむしろに、

いらいら沁みるものあり。

はたけ

畑の土のにほひか、

きのふ

昨日の雨のしめりか。

あかあかと阿波の鳴門の巡禮が

泣けば……………ころべば……………
 葦の葉が……………

にら

芝居小屋の土間のむしろに、

ちんちろりと鳴いづる。

やす

廉おしろひのにほひか、

けふの入り日の顫へか、

あかあかと、母のお弓がチヨボにのり

泣けば……………なげけば……………蟲の音が……………

芝居小屋の土間のむしろに
何時しか沁みて芽に出る
まだありなしの萑の葉。

旅役者

けふがわかれか、のうえ、
春もをはりか、のうえ、
旅の、さいさい、窓から
芝居小屋を見れば、

よその畑に、のうえ、
はたけ
麦の畑に、のうえ、

ひとり、さいさい、からしの
花がちる、しよんがいな。

ふるさと

人もいや、親もいや、
小さな^{ちい}街^{まち}が憎^{にく}うて、
夜^よふけに家を出たけれど、
せんすべなしや、霧^{きり}ふり、
月さし、壁のしろさに
こほろぎがすだくよ、
堀^{ほり}の水がなげくよ、
爪^{つま}さき薄く、さみしく、
ほのかに、みちをいそげば、
いまだ寝^ねぬ戸^{ひま}の隙^{ひま}より

灯^ひもさし、菱^{ひし}の芽^め生^{ばえ}に、

なつかし、沁^ひみて消^めえ入^る
油^{あぶら}搾^{しめぎ}木のしめり香^が。

青空文庫情報

底本：「柳河版 思ひ出」御花

1967（昭和42）年6月1日初版発行

1978（昭和53）年2月25日6版

底本の親本：「おもひで 抒情小曲集」東雲堂書店

1911（明治44）年6月5日発行

入力：Nana ohbe

校正：林 幸雄

2002年1月31日公開

2014年5月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

思ひ出

抒情小曲集

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 北原白秋

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>